神さまの怨結び
かみさまのえんむすび
12
守月史貴
KAMIZUKI SIKI
Champion RED Comics
RED

神さまの怨結び 12

❖かみさまのえんむすび

守月史貴

Champion
RED
Comics

■怨結びの呪いを授けていた神。クビツリを通じ様々な人間と接することで、その心は変わっていった。紅と佐々の策謀によりクビツリとの繋がりが断たれた時、自分が起こした全てを思い出す。それにはクビツリに深く関わることもあり……。
くちなわ
蛇
クビツリ
■赤縄で首を吊って以来、呪いを欲する少女を蛇へと導く役を負う。その体は九来木辰巳という男。では中身、その正体は？
妾の願い、俺の願い、寄り添う互いの願いは一つになり、やがて——
紅
コウ
■蛇より別れたもう一人の神格。その正体は神社の御神木で一度は蛇により消滅されたが復活を果たす。櫻の後輩、佐々の昏い欲望に目をつけ、彼を使役しているが……。

怨の縁に絡め取られた人間たち

乙梨 叶 おとなし きょう

■クビツリと両思いの少女。その想い故に蛇を殺そうとまでした強い意志を持つ。

名無 ナナ

■呪いを使ったまつりの死産の子の魂が母体に宿り名無に。クビツリによく懐いている。

櫻 美咲 さくら みさき

■同級生に呪いを使った過去を持つ刑事。今ではクビツリや蛇の協力者になっている。

稲葉 いなば

■櫻を好きなのにからかっていた結果、呪いで消されてしまう。

千石 せんごく

■まつりと怨を結び、この世から消えてしまう。つまり名無の父。

安登まつり あとう まつり

■名無の母。呪いの代償として魂を喪失させてしまう。責任感と情に厚い委員長。

佐々 ささ

■櫻の部下。歪んでしまった彼女への恋慕が昏い気を生み、そこを紅につけ込まれる。

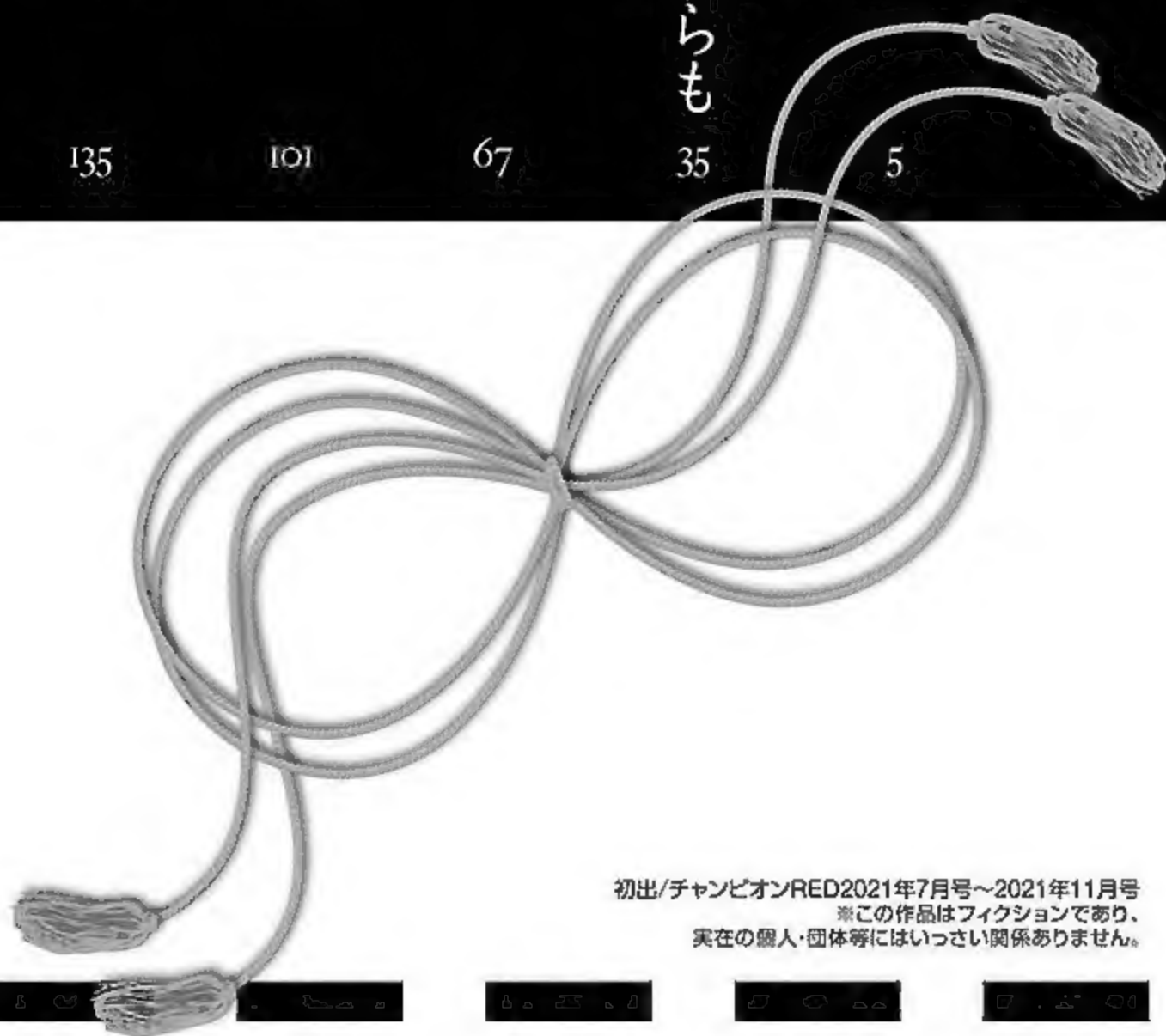
紅を止めるため二人が儀式に臨む

警察を辞めた櫻と安登。これからのことを話し合った結果、安登は櫻を含め、家族とのBBQを決行、笑顔に満ちた一日を過ごす。その帰り、安登は名無の激情を受け止め、二人は初めて互いを受け入れあうのだった。

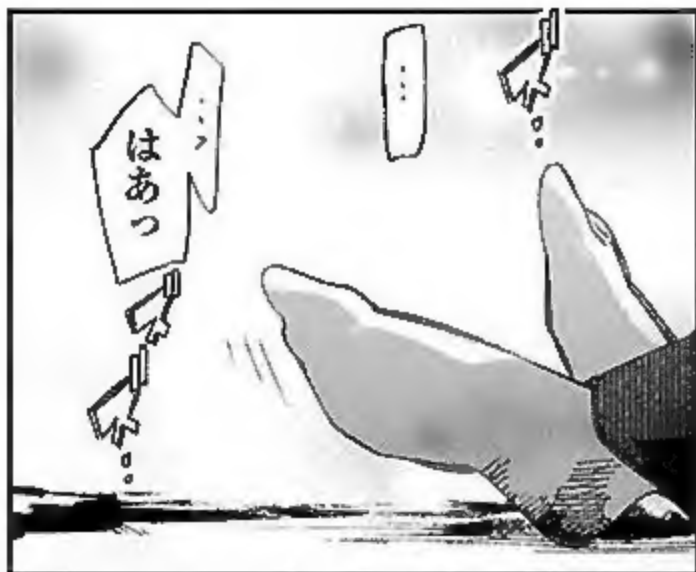
翌日、紅と佐々の怨結びを止めていた櫻は、直談判するため彼の家を訪れていた。そこで彼女は、佐々の隙をつき紅と繋がる鳥居を壊そうとする。だがそこへ櫻を亡き者にせんと紅が介入、魔手が櫻に伸びる。それを見た佐々は櫻を庇い、代わりに重傷を負ってしまった。その瞬間、紅に大きな変化が!?

一方、儀式の準備をしていたところ、紅の変化を感じた蛇は、儀式を急ぐようクビツリに迫るのだった。そして――。

蛇とクビツリ、そして少女たちの選択の果てにあるのは――!?

目次

初出/チャンピオンRED2021年7月号～2021年11月号

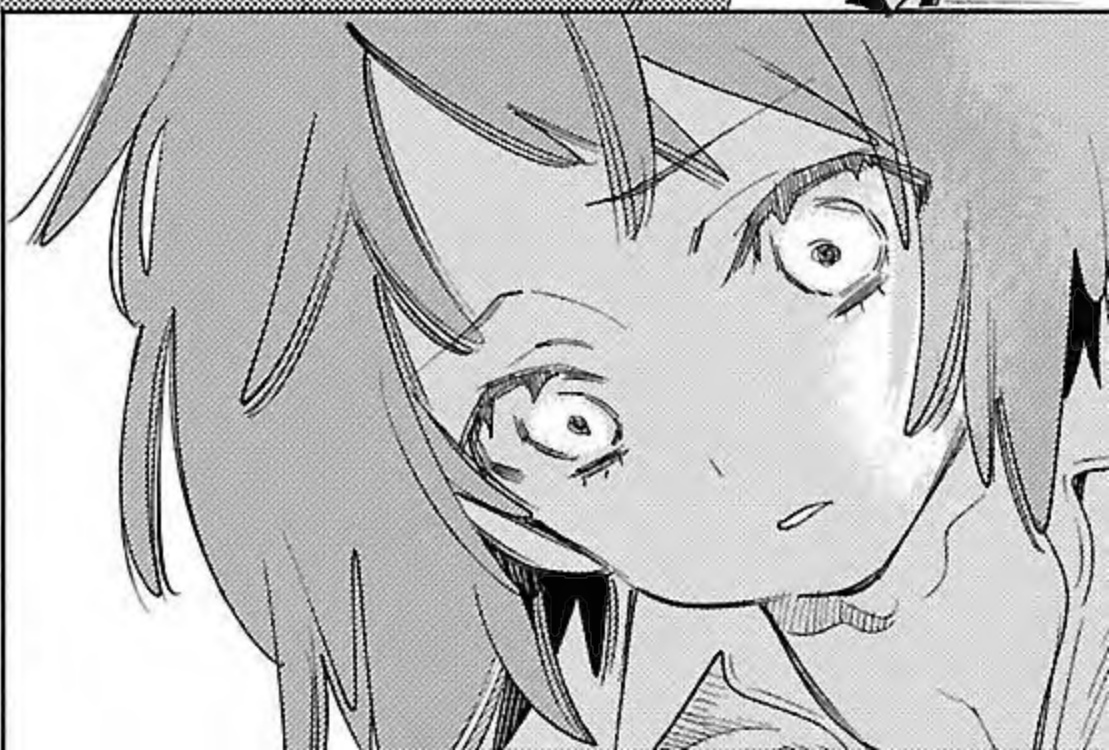
こ ここまで……
はっ 来れば……っ
はっ

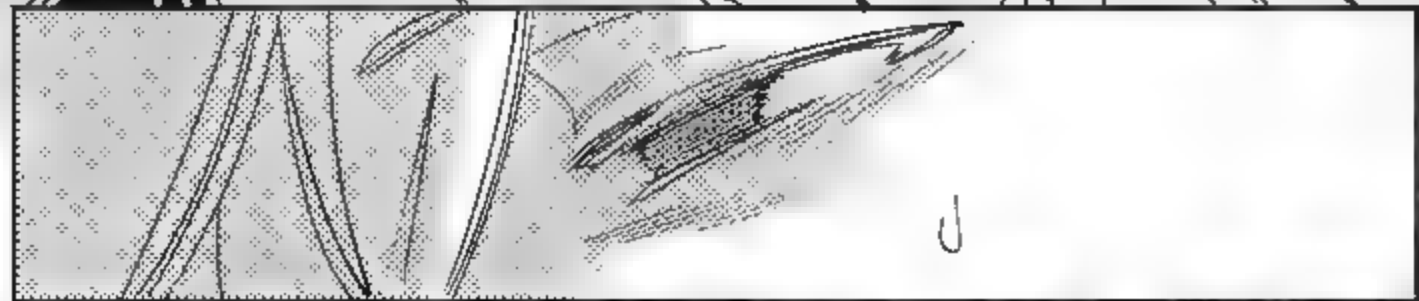
佐々くん!
携帯!! 持ってない!? 今救急車を——
逃げろ……てのに……ほんっとどんくせー女……
も……放っといて……くださいよ……
……うっ……
…さいなぁ…
もういい! その辺の人に電話借りて——
ほっとけるわけないでしょ!?
……俺

俺はねえ……
これまでずーっと
テキトーに……生きて
これたんすよ……

え
なに……？
経済…的にも
親にも恵まれて……
まあまあモテたし……
勉強も…進路も
『適当』に順風満帆で……

警察官に
なったのも単なる
その延長で……
ご大層な
理由なんて
何も……ない

何を……
言ってるの!?
今そんな話
してる場合じゃ!!
……俺は

……『僕』は
ただ上手く
生きてるフリが
得意なだけの
空っぽな
何かだった
……以前の『僕』が
この有様を見たら……
心底呆れて
ますよ……

〝他人なんかのために何 必死こいてんだ〟
〝…だっせえ〟……って……
……ええと…
…つまり何が言いたいかって……
先輩の望むような『前の佐々くん』なんて
最初から居ないんだ
って…話……
—初めて『誰か』のため
一生懸命になった
初めて——
お前が…『クヒツリ』がいるから桜先輩はおかしくなった
殺したいほど誰かを憎んだ
先輩はあんなことする人じゃない!!
憎しみに任せてれば なんでもできるような気がした

あの骨女(ばけもの)に
出会ったことで
それは
『思い込み』から
『現実』になった
……二瓶(にへい)さんを
刺した時……
縄男を
切り裂いた時
俺が配った呪いで
女どもが消される時
……それに翻弄される
櫻(さくら)先輩を思い浮かべる
たびに――
生きてる感じが
した……

そんな……クソ野郎がね
本当の俺
なんです……
違う……
目的のためなら……何人消えようが壊れようが関係ない……
違うの!!
あなたは……狂わされただけ!!
怨結びに「紅」に
歪んだ私に巻き込まれてしまっただけ……
あんたに何が分かるんです

……知ったふうな…口
きかないでくださいよ……
なんの力も持たない俺が
『舞台』に上がれるチャンスだったんです
……っ
先輩と同じ場所に
だったら……教えてよ
なんのために怨結びなんかばら撒いて──
どうして私たちを裏切ったりしたの!?
・・・・こうなるまで……俺のことなんて
見も…しなかったくせに……
どうしてっ…

……今になって
私を
助けたり
したの……
……はは……
ほら
……やっぱりなんにも
わかってない……
……はあ……
……
これで
……そんなの

ぼくが……せんぱいのこと
きらい
俺も
先輩の
『傷』に――
……
……だから
……
さっ……
……佐々……くん
『僕』の時は
上手く生きてる
フリしてる って
さっき自分で
言った……くせに

なんで……っ
最後の最後に
なってまで
本音で話して
くれないの……!!
ジ…ワ…

うわッ!!
ガタ
ガタ
ーッ
嚥ー？
とた
とた
何 夜中にはしゃいでんだ……
どしたん それ
だから窓ッ 窓の外に……
……それがどうも要領を得なくてね
……君には何か見えるかい？

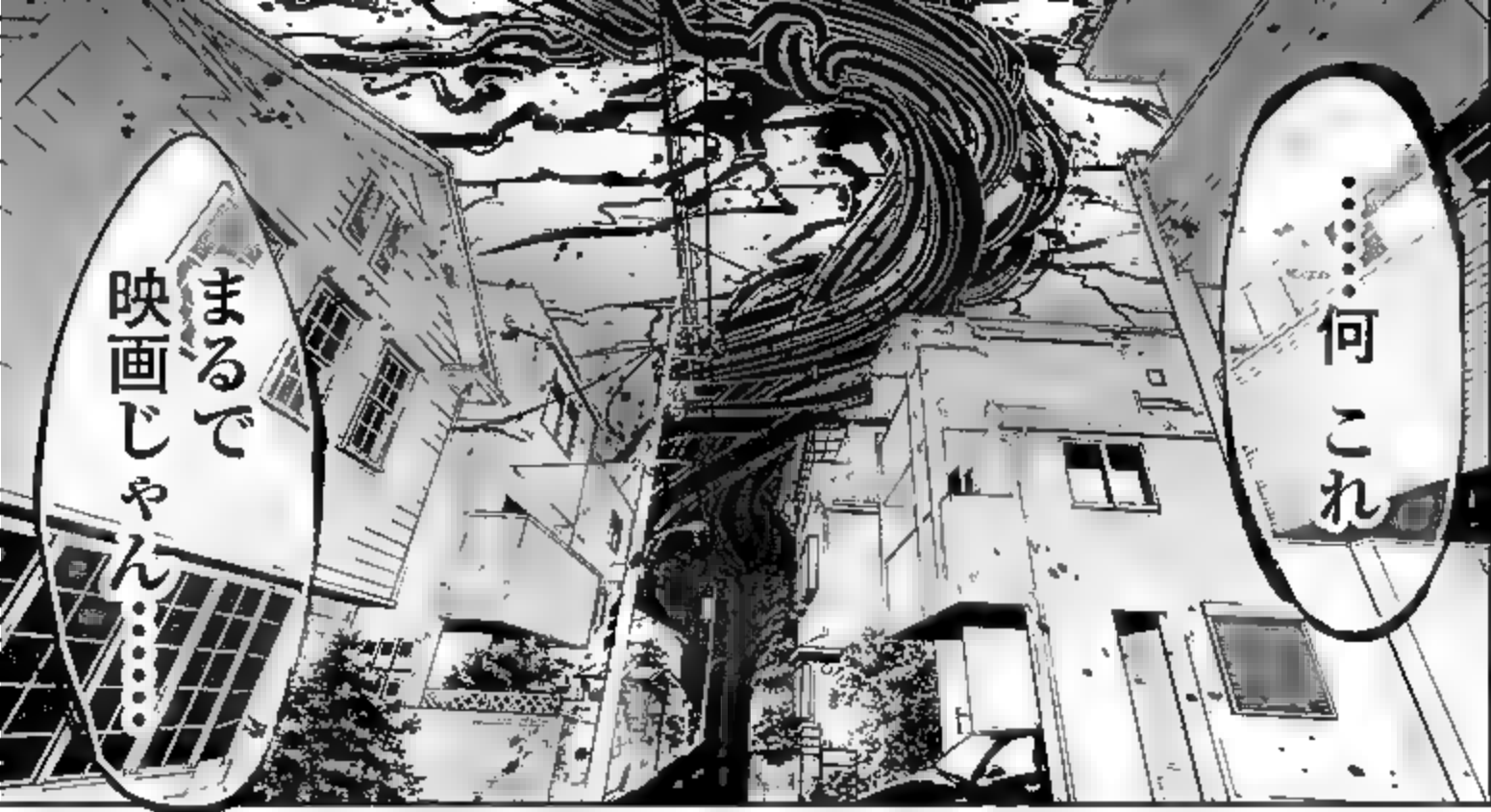
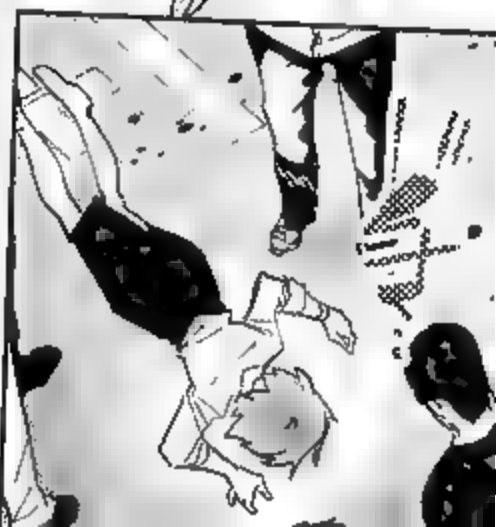
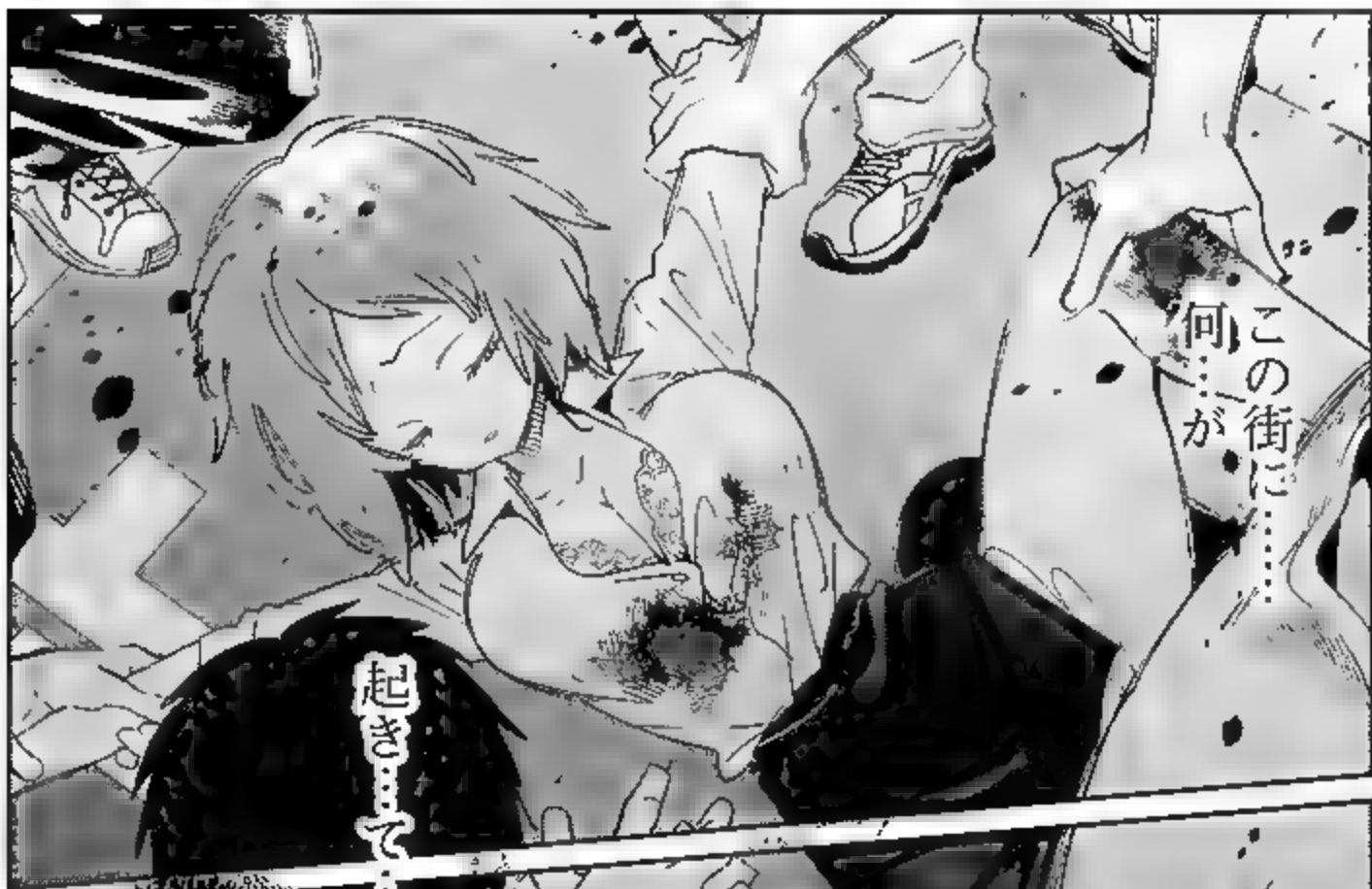
……何 これ

まるで映画じゃん……

これ……は……

いったい――

!

ちょっと!
あなたたち寄ってたかって何やってるの!?
その子から離れなさいっ……
どう…して……
この人たち
何か…
…様子が

この街に……
何……が
起きて……
……

……この地に住まう
呪われた民……
愚かな者どもよ

欲望のままに犯し奪い殺し合え――
全て喰らい尽くすまで
――事態は一刻を争う
躊躇っている時間はないぞ

まっ……
ま
待てっての!!
そんななあ!いっぺんに色々言われても全然ついていけねーんだよ!!
神になれとか乗っ取れとか!
ひとつに…
なれ…とか……
時間はないと言ったであろ
ちょっ……

ん゛
!!
ビクッ
ビクンッ
〜〜〜ッ!!!
!?

っ……はあ……
じゅるっ
借りた臓腑は返したぞ
名残惜しいが……充分楽しませて貰ったからの
……これ吐き戻すでないぞ？
万が一逆さに定着でもしたら大事だ
しかし──
ここまであやつの読み通りとはな
酒に弱いのはそなたの方であったか
のう？クビツリよ
ズル
ズル

何……しやがった……
蛇
げしっ
妾の呑んでいた酒ごと腹にぶち込んだ。
……ん？
てめえ……
……
やれやれ……なんだ？これは
スー
スス…
やめ……
や
きゅ…
ス…

やめ
やめろ……
ぐ…ぐぐぐ
卑怯だぞ……！
あやつとはしたくせに……
え？
……なんて？
痛ッでぇ！

……何故だ？
犬歯が邪魔で
あやつのようには
いかぬのか……？
ちゅっ
いや……
そういう
問題じゃ
……
……あれ？
てか……
さっきから
出てくる
『あやつ』って
……
ズキ
ズキ
コロ…

……ほれで文句なかろ
では改めて……
バカお前……
何やってんだバカ!!!

ふぁ!?
自分で自分の歯折る奴があるか馬鹿野郎!!
ああ～……っ何考えてんだもう……っ
ぽっ
な なんなのだ貴様……っ
引退間際とはいえ君はまだ神だぞ
馬鹿馬鹿と連呼するのは流石に不敬ではないか……
なあっ…蛇.

ここまでされたら
儀式が何なのかは
俺でも分かる……！
分かってる
けどな
俺はその…
つ…つい昨日
叶と……
昨日？
本当か〜〜〜？
そなた本当に昨日しか
しておらぬのか〜〜？
好いた女子と
最後の逢瀬で？
しっ
今朝……
も　したけど…
って
何の話を
してんだよ
とにかく
昨日の今日で
二人とっ
どうこうする
……ってのは
あまりに
不誠実
というか
他に手立てが
あるなら
そうしておる！

……え？

好いた男に他の女を抱かせるために

ここまであやつがどれだけの感情を殺し策を巡らせてきたかなど

妾(わらわ)には到底うかがい知れぬ

は？お前……何言って

叶はこれから起こること
全て承知の上で――
そなたを
送り出したのだ
クビツリさんを――
『神』にするため
契りを交わす……？
そうだ
つまりあなたは儀式で
彼と体を重ねた上に
私から彼の全てを奪うと
この私に言っているの？

……そうだ 怨結びを止めるには もはやこうする他ない……
そなたの気が晴れるなら また何度でも 妾を殺してくれて構わぬ
……しませんよ そんなこと
だってその行為には「愛なんてない」のでしょう？
ならそんなもの 虫の交尾以下だわ

……でも彼が そんな儀式…… 受け入れるかしら
そもそも さっきの話
朽ち縄の瘴気によって 生前あらゆる「縁」を 奪われていた彼って——
……女を知らぬのは 必然……だからこそ
儀式の本番で 「失敗」なんてことも あるやもしれぬな……

……分かりました
じゃあ こうしましょう
………
ザザ
ザザ

そなた…正気か？

聞こえませんでした？
私はあなたたちの儀式の『練習台』で構わない
と言ってるの。
その代わりあなたはこれからの行動全て私の指示に従うの
彼の願いを叶えてあげたいと思うなら……ね

あなたは
自覚がないかも
しれないけど
彼の『ブレーキ』に
なっているのよ

どんなに
私を愛していても
あなたが居る限り
彼は最後の一線を
決して越えられない
ザッ
ザッ

何故なら神社で独り 彼を
待ち続けるあなたを残して
自分が幸せになることは
決して許されないと
思い込んでるからよ

かといって私を愛する
あの人は儀式といえど
私を差し置いて
あなたとセックス
できるほど割り切った
性格でもない

…その自信は
いったいどこから
出てくるのだ?
つまり儀式へ
いたるまでの
最大の
『難関』は――

あなた自身よ
蛇が邪魔!!
だから……
やっぱり殺される

あなたの方から一度彼を『切り捨てて』ください。

『そなたはクビだ』

そしてクビツリさんの心の拠り所が私一人になったところで

彼にとっては辛く受け容れがたいこの『真実』を私から伝えます

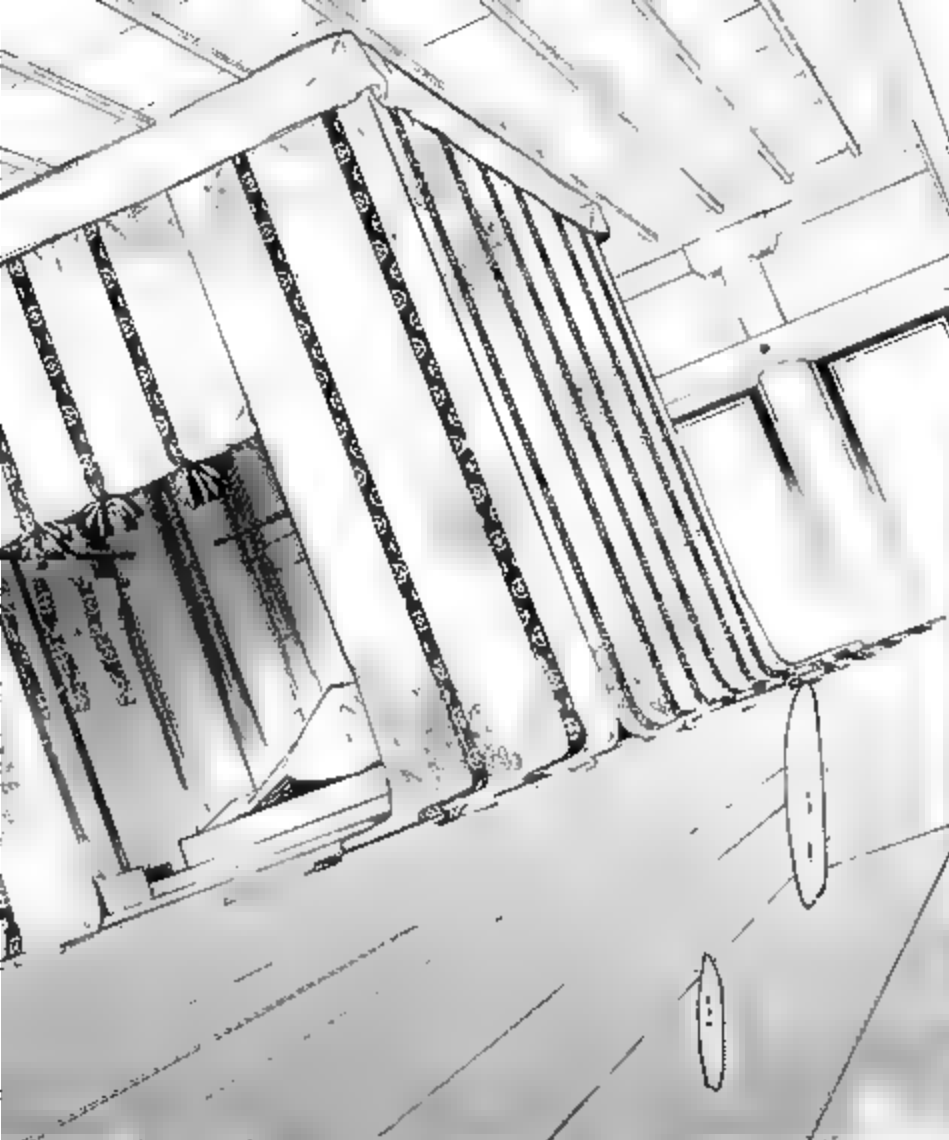
そうして彼が最も弱ったところに手を差し伸べて——

「私はあなたを救いたい…」

そこまでお膳立てすれば流石の彼でも——

……と言いたいところだけど……
それでも上手くいくかどうかは……賭けよ
……意外だの
そこはもう少し自信を持っても良いのではないか？
私が思うに――
生前の『彼』はきっとその生い立ちから人を愛することを誰よりも恐れていて……
それを知らずに模倣しているクビッリさんもまた
親兄弟 親しい友人 俺に関わった人全て
何らかの不幸に見舞われ消えていった
罰が
ばち
恐れているんだわ
止めるには もう……俺が死ぬ他な
……かもしれぬな……
だったら

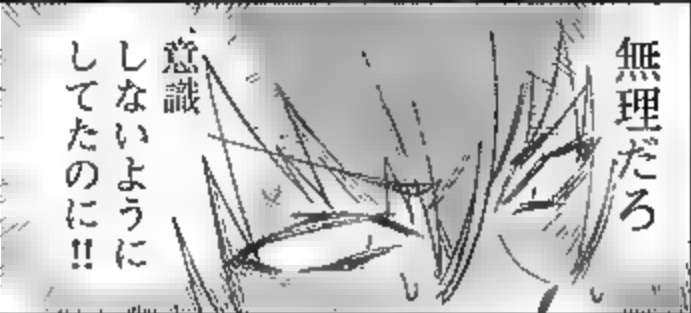
その幻想をぶち壊して
あげるのが
私の役目よ。
いや……！ しかし
練習台というのは
違うのではないか？
奴にとってはそなたこそが本命で――
いいの
彼の初めてになれるなら
私はどんな形だって構わないもの
ゴッ
その代わり

そこから先は
『命を懸けて』彼を救って――……
……叶……!!
ついでにこの妾の姿も
酒を使った作戦も
奴の提案なのだがな
約束通り神としての
「命を懸け」そなたの
願いを叶えよう

……安心せい
この身は所詮
神力でヒトの形を
かたどっただけ……
…
…
妾の本当の肉体は
そなたが御神木の幹に
安置した死体の方だ
不義には
当たらぬよ……

そこ…はッ

!

な

…なんでもない
続けよ……!

無理だろ
意識
しないように
してたのに!!

叶……

あいつへの想いは
変わらないし

これは「儀式」と
割り切ってる──

なのに

どうして蛇が
こんなにも
美しく見えるんだ
あ
あっ
クピッ
リ……ッ
——そうだ

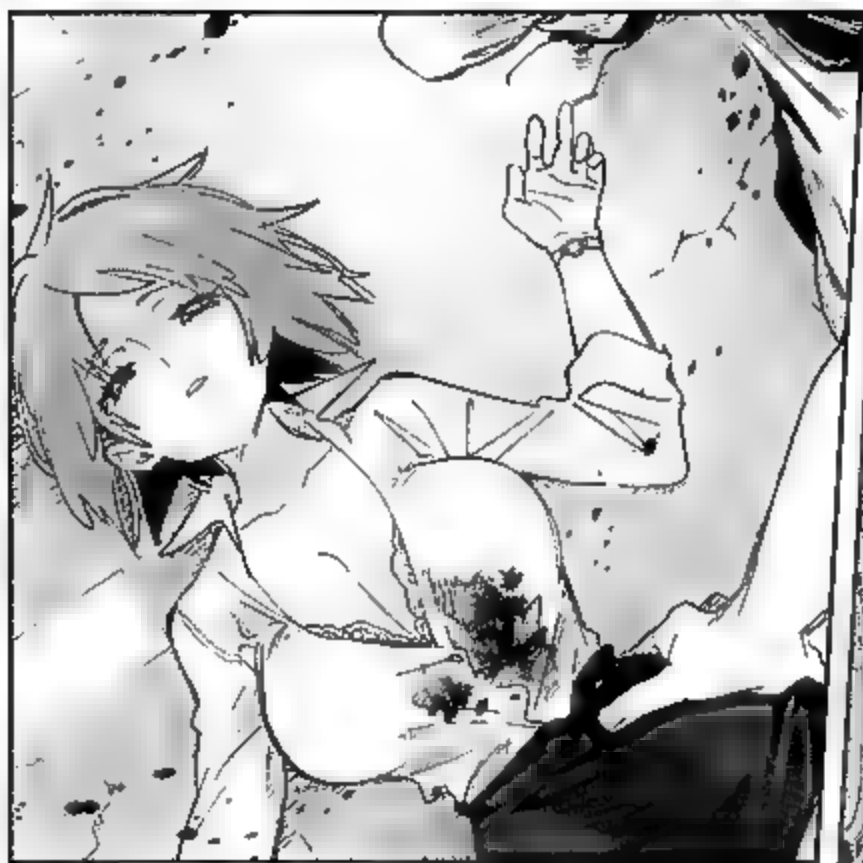
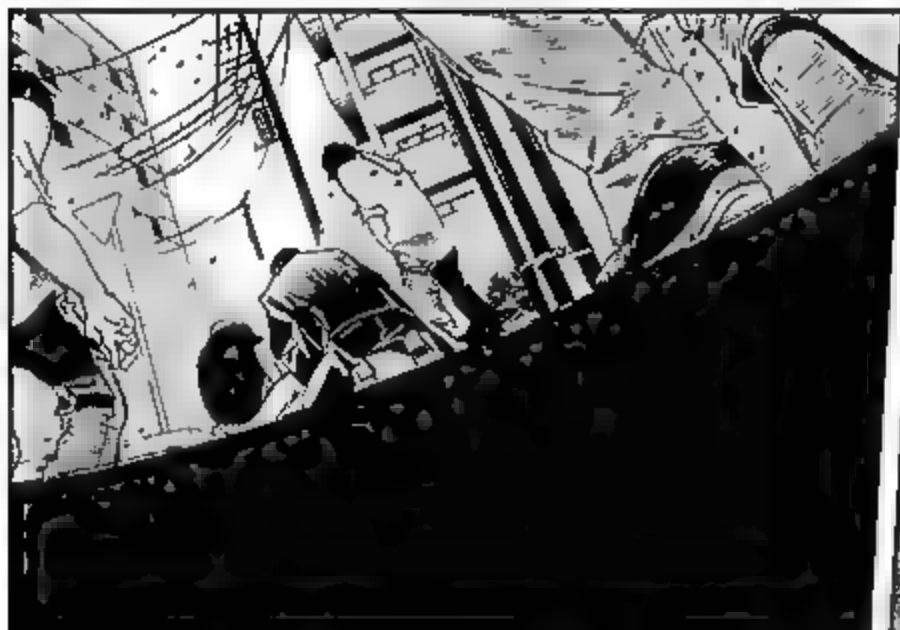
初めて会ったあの時から
恐ろしい笑みを浮かべる蛇を前に
俺は身動きひとつ取れなかった
魅入られてーーしまった
ま 待て……
んえ⁉
少し…っ休ませ……
先に気を遣ってしまいそ…だ
からっ
あっ？ああ……
気をやる？
……
気まずい
……か 仮に俺が神？になったとして……だな
その後どうするんだ

ま……
まず……紅の暴走を
止める……ことだな

奴はこれまで
朽ち縄を道具として
いいように操ってきた
……つもりだろうが……
実際力を持つのは
我々でなく朽ち縄だ……

だからその道具が……
そなた自身が神となれば
『状況』は大きく変わる……
ストッ
……見よ

!?
なんだ……これ

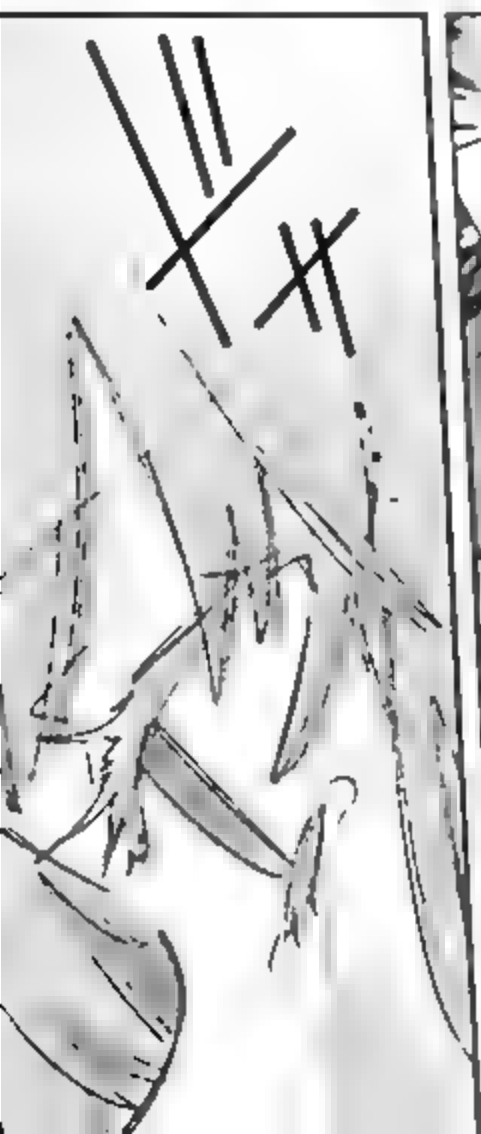
これが今……
実際に『現世』で
起きていることだ

誤った形で『怨結び』を
ばら撒きつづけた神の――
哀れな末路だ
――ああ
また
この光景……

前はいつだっけ……
高校の部室？
大学のコンパ？
……どうでもいいっか
どうせ私は他人と
交わったところで
何も感じない……
苦しみも
幸せも
生誰とも
心を通わせる
ことなく——……

ん――!!
馬鹿じゃないの!?
私 佐々くんを失っても まだそんなこと――

櫻!!

櫻さん
早くこちらへ!

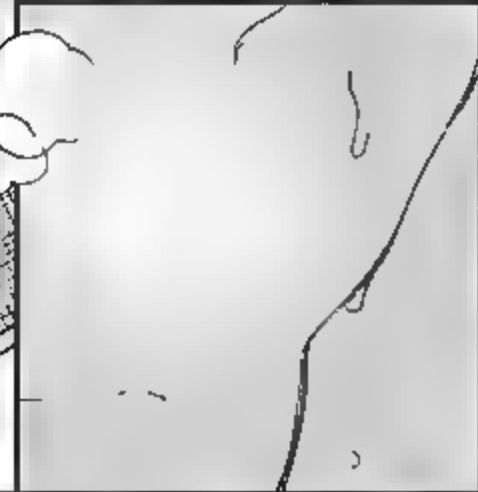
よし
囲まれる前に
出すぞ!

……呪いを介して
紅に流れ込んだ
信仰とはほど遠い
人間たちの邪な欲望……
そして奴の持っていた
尋常ならざる『神』への
執着が——
紅をここまで
変えてしまった
あのおぞましい姿……
あれ自身もはや怨結びの神
などといった役割など
覚えておらぬやもしれんな
神の姿というものは その
内面を映し出すものだから
そういうもん
なのか……
——ああ
じゃあお前は
よっぽど良い
神様なんだな

このっ……
女誑しが！
いいから早う続きをせんか!!
お前が休むって言ったんだろ!?
……大変な時だというのに
まったく……っ
……妾は何をしておるのだろうな……

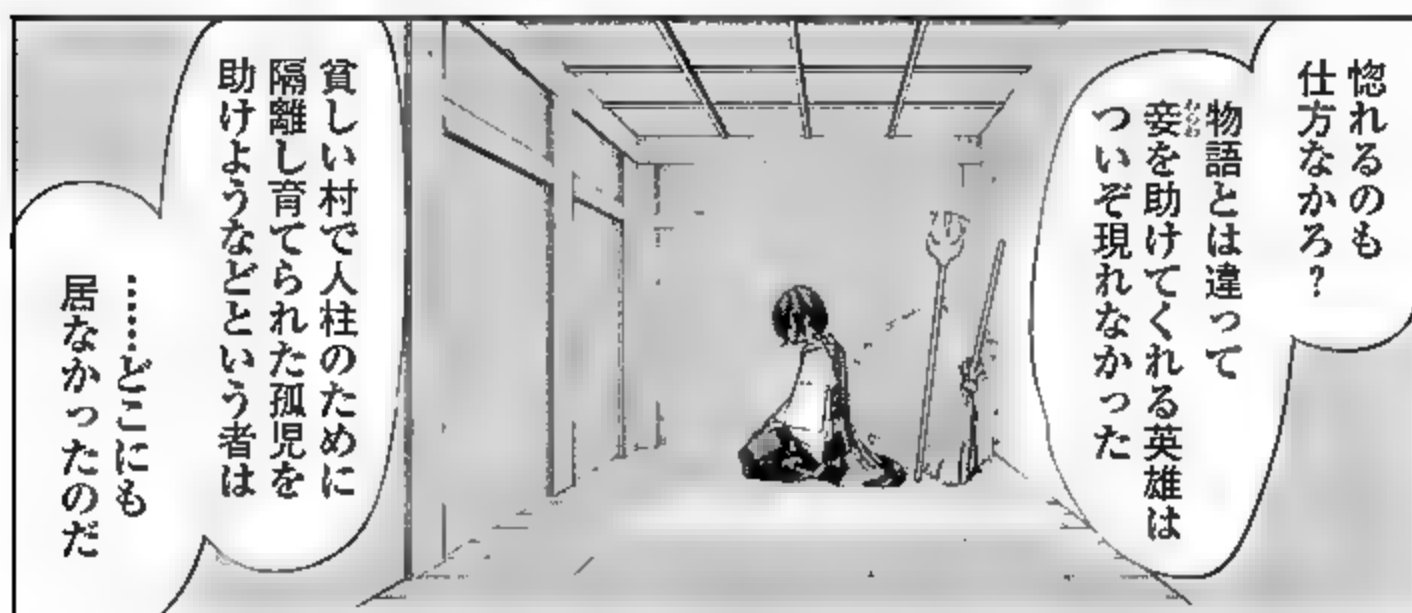
俺が神になったら――
お前はどうなるんだ？
妾か？
妾は――
…そうだの
妾は――
この『櫛』に
なろうかの
ふふ……
巫山戯た冗談と
思うたか？
実は名無が神社に居る間
興味深い話を
教えてくれたのだ
そなたも
聞いたのであろ？
〝娘を喰らう
大蛇の話〟を

クシナダヒメを喰らおうとして
スサノオに討ち取られた――
〝ヤマタノオロチ〟
スサノオは御守りとして
クシナダヒメを櫛に変え
髪にさしたそうだ……
……全く
良く出来た
話だよ
まるで縁結びそのものが
その神話になぞらえられた
みたいに
だけど

まさか自分が
何百年もお前を苦しめ続けた
忌まわしい大蛇だなんて
考えも
しなかった……
そう嘆くな……
神話の姫は
スサノオと一緒に
なったらしいが——
妾は別の結末を
考えたのだ
他にどんな
終わり方が
あるってんだよ

大蛇に惚れてしまった娘が居て……
櫛を贈った相手は大蛇であった
……そんな物語があったって……よいではないか――
蛇っ……
そなたにならば――
喰らわれてもよい
残さず綺麗に喰ろうてくれ
その代わり
どうか妾の全て
一滴残さず――

――お前……
ヒトから
神に戻る時
言ってたよな

ん?
いや 俺のことはもう忘れる みたいなことをだな……

「この未練は肉体と共に置いてゆく……」
あれは嘘だ
嘘お!?

惚れるのも仕方なかろ?
物語とは違って妾を助けてくれる英雄はついぞ現れなかった
貧しい村で人柱のために隔離し育てられた孤児を助けようなどという者は
……どこにも居なかったのだ

神にされてからも妾と共に居てくれたのはそなただけ……
妾にはそなたたった一人だけだったのだから……
……蛇!

？

俺と九来木の共通する願いは この怨結びを終わらせて――

お前を自由にしてやることだ！

でも…っ

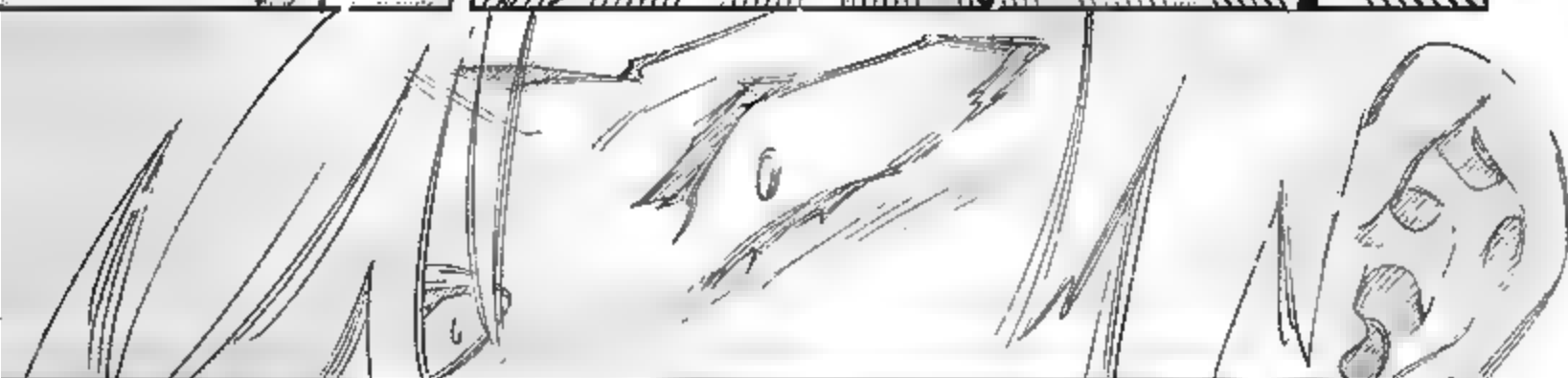
俺はまだ一度もお前の望みを聞いてない！

俺達の願いの先にお前の幸せはあるのか――!?

妾の…望み

妾の幸せは――

……妾の望みはな
もう……叶っておるのだ
えっ？
叶っておる…
…から
蛇……
……いや……

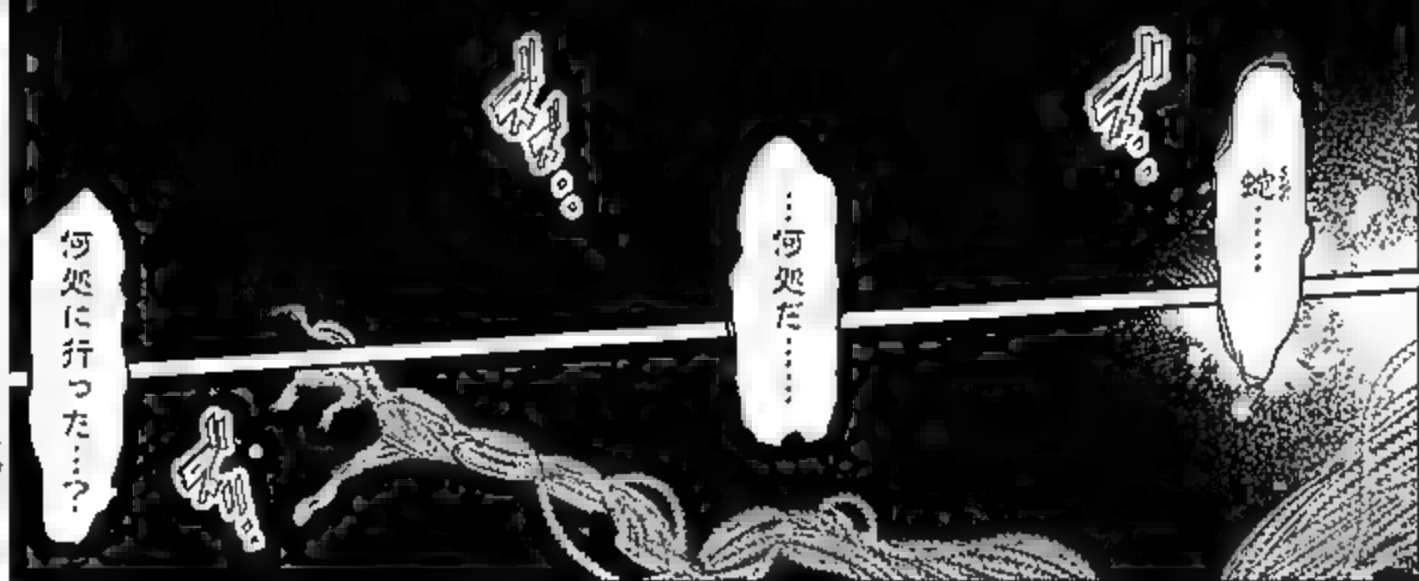
……嫌だ!!
本当はそなたと離れとうない!!
この手が無くなるなんていやだ!
妾が消えるのも嫌だあ!!
すいーっをくれて……っぐずっ…
時々頭を撫でてくれて……
…すいーっをくれて……
…食い物ばっかじゃねえか
…はあ……最後の最後で言ってしまったなあ……
……忘れてくれ

すまぬな……もう
大人の姿を繕う
力も無いのだ
妾は……
妾は役目を
終えるのだな……
これからは
お前の居たい所に
行けば良い
今後はお前の
代わりに俺が
ここに居る――
もう……撫でては
やれないかも
しんねえけど
昔に戻るだけだ
――多分……

ただ違うのは……
もう俺がお前を縛る
必要がないってことだ
お前は
苦しまなくて
いいんだ……!!
……ああ──……そうだ
それだけで俺は──……
そうだったの

姿形は変わっても

ずっと一緒だ

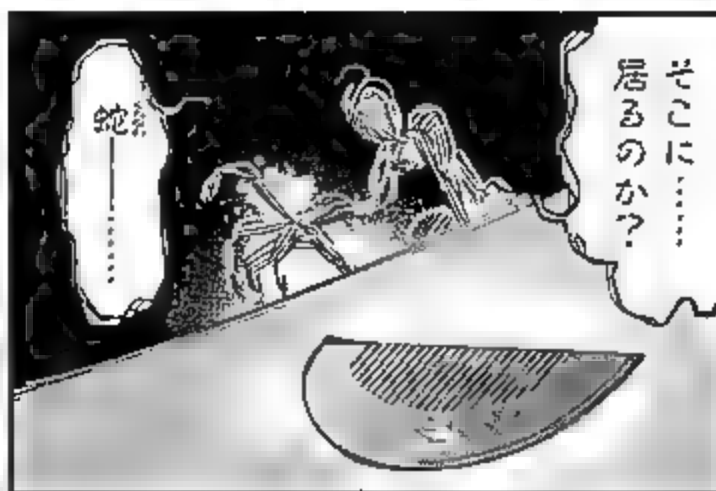
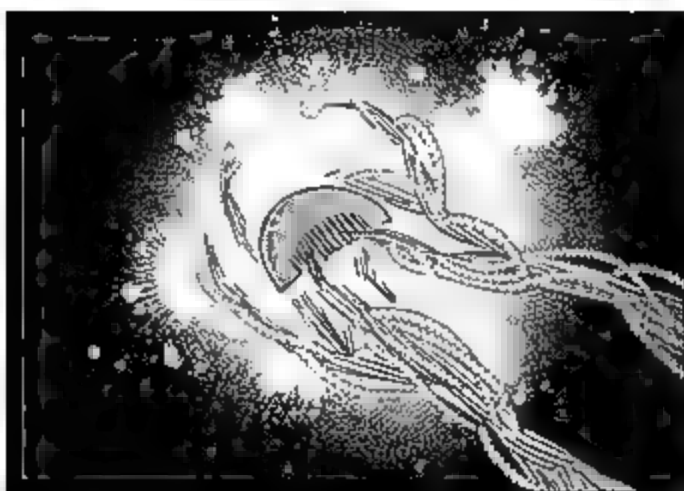
・・
・・・
・・ち
くちなわ

第六十六節❖魂梳り

〃——貴様が見事 妾と契りを果たした時 妾は呪いで消滅し——

貴様もまた呪縛から解放されよう——〃

俺が蛇（くちなわ）を消した
この手で――消したんだ

〃――妾は……この櫛になろう――〃

お前の
本当の名前すら聞いてない――

安登……さん

あの

どうして
私の居場所が……？

囃と名無くんが
外の異常に
気付いてね

君の所在は掴めなかったが
次に大きな動きが
あるならば

恐らく佐々くん周り
だろうと踏んで来てみれば
案の定だったよ

……ところで

肝心の
佐々くんは？

……彼は
彼は…亡くなり……ました
紅に襲われた私を庇って……

──……
……
そうか……

……結局
何がしたかったんだよアイツ

この異常事態にも少なからず関わってんだろ?
そんな奴がなんで今さら紅を裏切るんだよ
……分からない

分からないけど……私いっつもこうなんです
気持ちが分からないまま相手が居なくなって……私は後悔する…ばかりで……

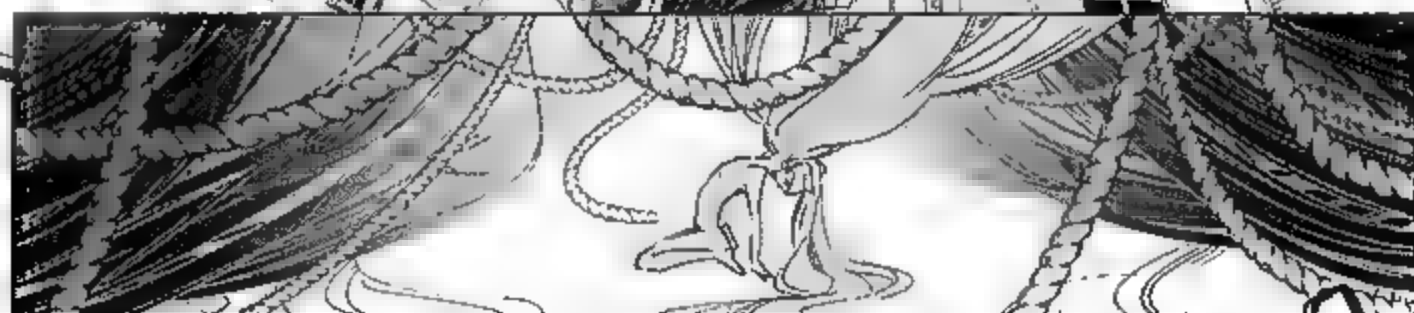
あの時私が間違えなければ
……もうじき全部終わりますよ
今 彼が……クビッリさんが頑張ってるから
佐々くんは……
稲葉だって――
間違えたことを後悔しているのなら『次』間違えなければいいの

――吾は
小さな村を一望する
丘に根を下ろす
一本の桜――
『……憎い』
『憎い――』

まるで紅を差したように
ひときわ鮮やかな花をつける
吾を村人たちは
『紅桜』と呼んだ
村の男女が吾を目印に
逢い引きをするように
なったのがきっかけで
いつしか
『この桜には縁結びの御利益がある』
と語り継がれるようになった
そして時は流れ……
かつて
川の神を封じた
という謂れを持つ
『赤縄』と共に
祀られた吾は――

二つを併せて

『アカナワ様』と崇められるようになった

……

何故

今になってこのような古い記憶……

鮮やかだった花は年月と共に白く色褪せ

——否

それどころか吾の本体は最早跡形もない……

大穴を穿たれ

血肉で穢され

吾は死んだ

勝手に祀ったと思えば自分たちの都合で殺す……

なんとも愚かで身勝手ではないか

そう――
これこそが
奴らの本性
吾は神
あの時滅んだ
村と同じ
ならば
この地を呪う――
祟り神
この地に
住まう者全て
末代まで祟ってやる――…

──情けねえ
『神』が聞いて呆れるな
どっちかっつーと悪魔だろ？
その薄気味悪い姿──……
それこそ『愚かな人間ども』の影響を受けた結果だろうが
お前は祟ってんじゃねえ──
『毒されてる』に過ぎないんだよ

死体の
――貴様はもう存在しない！
汝ラ……
朽ち縄は全て吾が手の中に在る
中身を失った空の器が動くなど……!!
……おに い……
ちゃん……？
……成る程
お前には そう見えるのか

それはな
お前が……
無意識のうちに
クビツリを恐れているから
「そう」見えちまうんだ
お前も薄々
気付いていたんだろ?
神という座に
胡座をかいていたが
実のところ――
朽ち縄に
人々に
『使われていた』のは
黙れ!!

!!!

何故……朽ち縄が従わぬ!?

まるで意思を持つかの如く吾を拘束する——!?

これまではうまいこと朽ち縄を

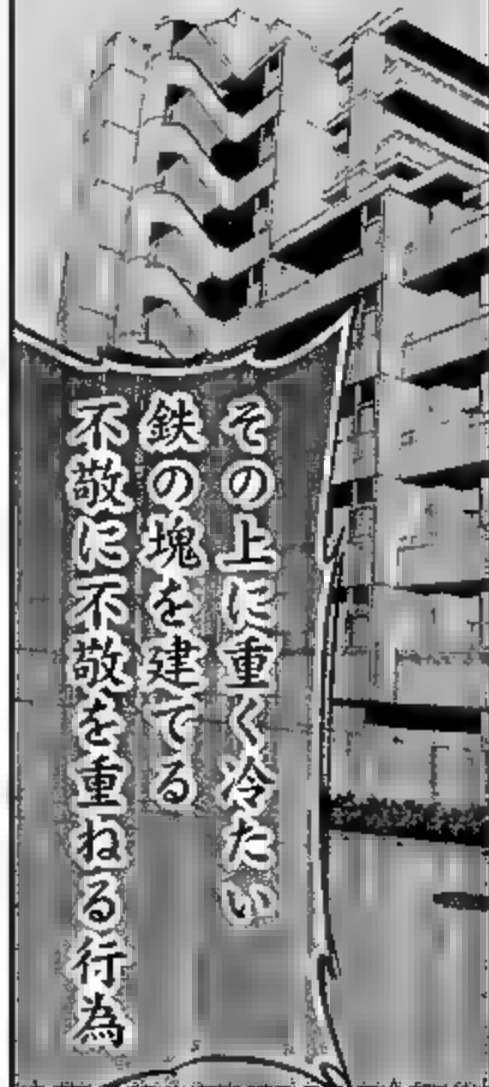
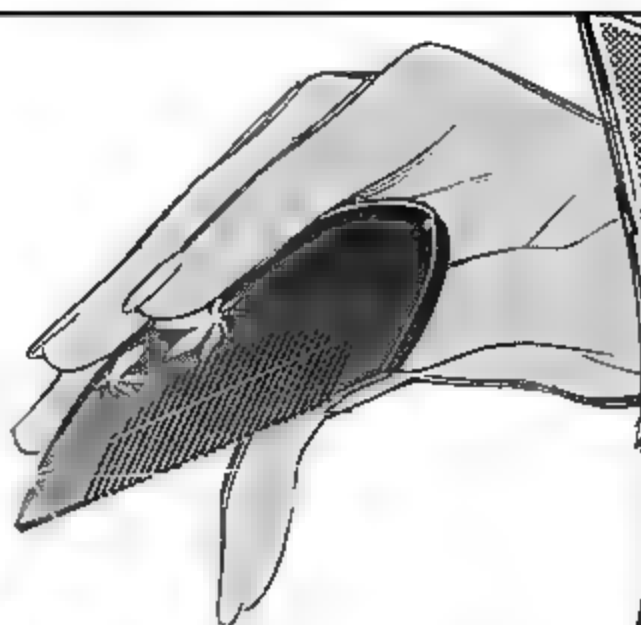
使いこなしてきたつもりだったんだろうが——

お前は最初から『使われる側』なんだよ

紅

何故
神社から出られぬはずではなかったか!!
貴様が現世に居る――
ましてその身体は……
あの時吾の前で確かに死んだ!!
生き返るなど有り得ぬ!!!
……言い忘れておったが
今の妾はただの「使い」……

怨結びの神さまはの
動く死体を使いに出すのだ
おぬしそんなことも知らぬのか？
もう一度言おう
おぬしは『使われる側』なのだ――
……妾と一つになってな!!

……!!!
やめ……
やめろ……近寄るな!!
貴様ら穢れた民と一つになるなどもはや我慢ならぬ……!!
吾は赦しはせぬ……!!

穢され
朽ち果て
二度と咲けなくなった
吾の骸を長年晒した挙句
土で全てを覆い隠し……
その上に重く冷たい
鉄の塊を建てる
不敬に不敬を重ねる行為
この怒りは
あの土地に
住まう人間ども
全て
死に絶えるまで
収まらぬ——

――ならば何故
そのような
辛い表情をする
ことがある……
……妾はずっと
ひっかかって
おったのだ
紅
おぬしは何故……

神失格となった妾をわざわざ『人にして』現世に堕とした？
いや……そもそも
かつて我を忘れ祟り神と成り果てていた妾の元へ人間を――……
何故 大人になったあの童を神社に来るよう唆し
妾の元へ送り込んだりしたのだ
今思えば妾を陥れるためと言うにはあまりにも回りくどい……
まるで妾を試すような――
……
……紅
もしや おぬし――

……実際そこまでは少なからず神で在ろうとする意思をおぬしから感じられたのだ

だが今は……

……すまぬ
かつて縁を結ぶ良き神だった
そなたと赤縄を穢し……
ここまで貶めたのは
妾を含め
人間たちの身勝手だ
妾の怨み
人々の業をその一身に
背負わせ続けてしまったが——
……もう良いのだ
……巫山戯るな

人間の
死体風情が
神を憐れむか

不敬だぞ!!

妾が怨結びを
終わらせようとしたことも
気に食わぬのであろ？

神にとって信仰を失い
忘れ去られることは
死を意味する――だが

妾は何も役目を
終えようなどとは
考えておらぬ

怨結びは
確かに多くの
悲劇を生んだが

それでしか
救われぬ者も
少なからず居た……

使いようで
呪いにも
救いにも成る

結局は求める人
次第なのだ

……なに

・・・また一から・・・
始めれば良い・・・

……妾の仕える神は
大層なお人好しでな
縁を結ぶも
切るも人次第
どうせ
使いようならば
「選ばせて
やればよい」などと
のたまうのだ
怨結びを……
続ける……？
いいや
縁結びだ

──そうだ！
御利益が広まれば
我らを迎えてくれる
神社も現れるだろう
大きな桜もある
やもしれぬぞ？
その時はおぬしを
接ぎ木すれば……
桜の一部となってまた
花を咲かせることも
夢ではない！
……吾は
また
……咲けるのか……です？
おっ
やっと
食い付いたな
妾の仕える神が
言うのだから
間違いない──
これを見よ

驚いたことに――
この枝はまだ・・・・・・生きている
いつぞやは折って悪かったが
御神木の力かはたまた信仰の力なのか…何にせよ
宮内の先祖はそなたを偲び枝だけでも丁重に保管してくれていたのだ
そこだけは感謝せねば……のう
……考えもしなかったのです
……そんなこと
そなたがあれほど神に執着した理由――
……またあの花を咲かせたかったのではないか？
……そうだ……
枯れた吾には誰一人――見向きもしなくなったのです……
それが何よりも悲しかった……

妾も生前 よう 眺めておった……
境内から見上げる桜が また大層綺麗での
老木ゆえに 色はなく――そう
今のそなたの ように
純白の花が 粉雪のように 降り注いでな
それは見事で あった……
……ふん
おだてても 何も出ぬの です……
でも……まあ

そこまで言うのなら――
もう一度咲いてやっても良い
……のです☆

――ああ

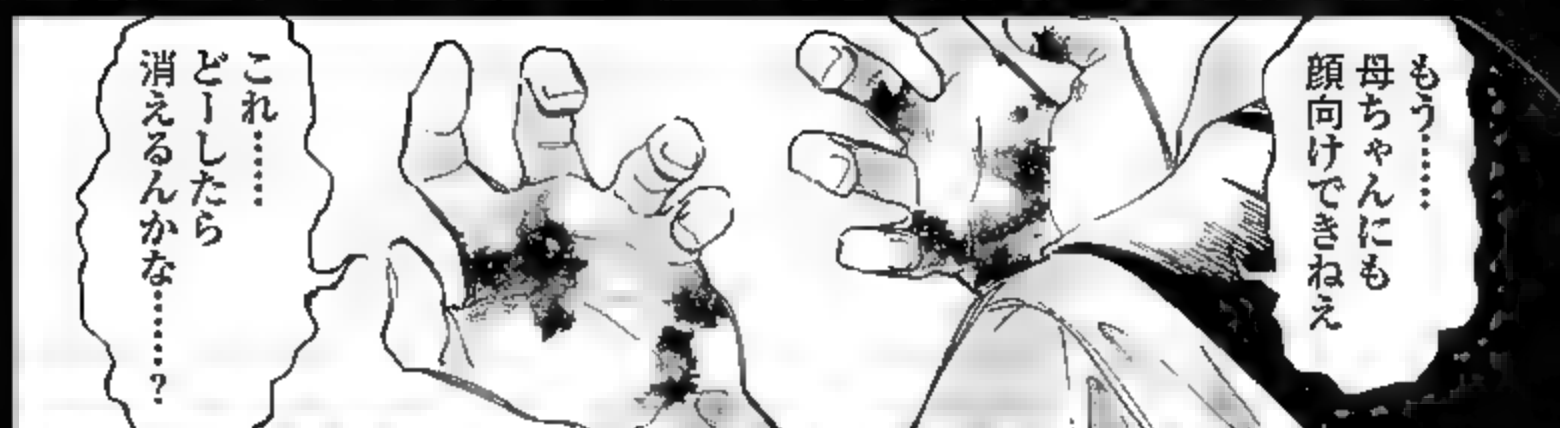
それまでの間
しばし妾の中で休むとよい……
『紅桜』よ

――さて……
あとはそなたに
任せたぞ――

皆との約束を――……
……え？
……気のせいかな
いま
後ろに誰か……
居たような

第六十七節❖あの日の選択

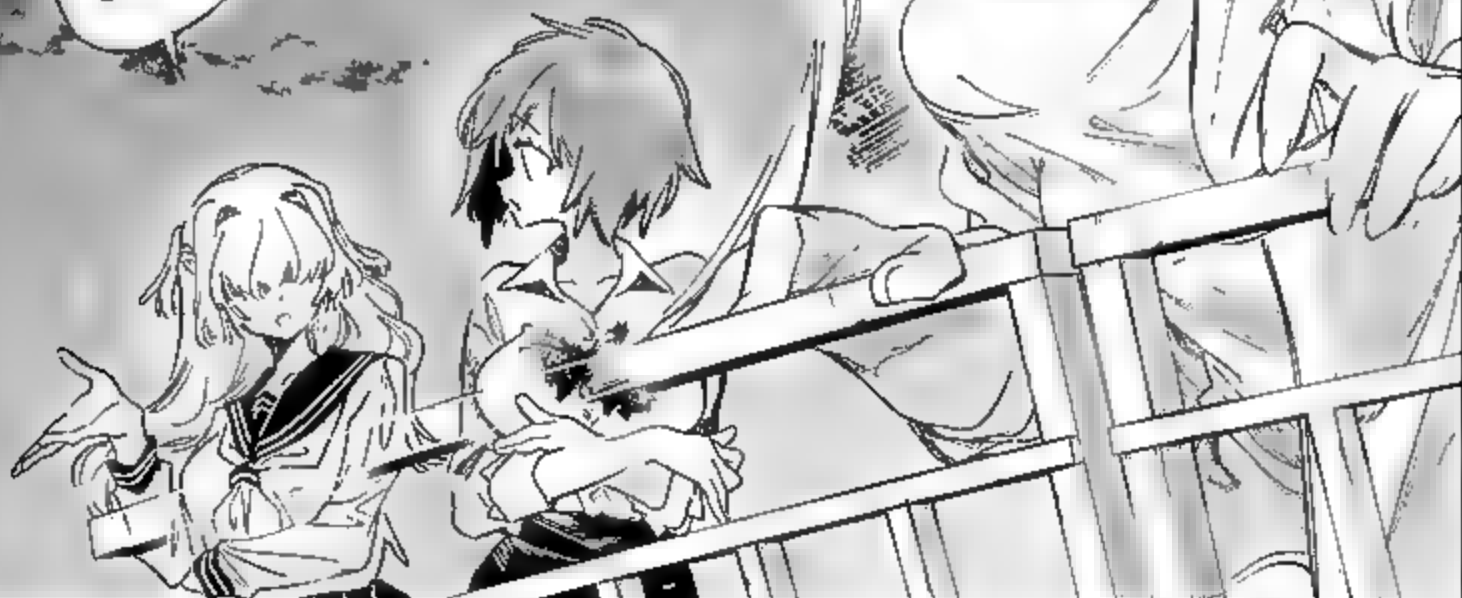
私はただ 彼を助けたくて――

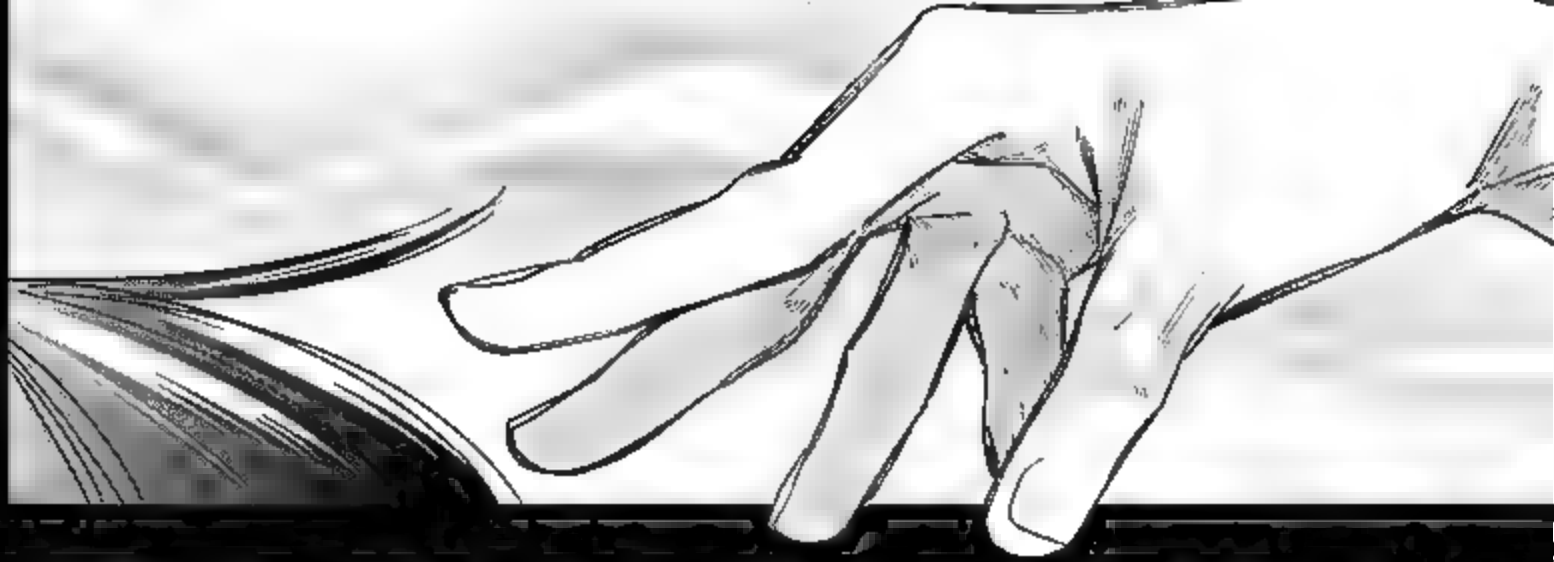
せっ……千石
やめて
もうやめて!!
私は大丈夫
大丈夫
だからっ……!!

もう……
母ちゃんにも
顔向けできねえ
これ……
どーしたら
消えるんかな……？
拭いても拭いても
消えねえ……
消えねえ
よ……
怨結びの
……呪い
呪いで消えた
人間はどこへ
行く…？
此処でないなら
何処でもいい

ひっ……一人で
死なせるくらいなら……
……っ
私が
消してやる……
私も
今の私は……
す
すごい魔法が……
使えるんだ……!!
一緒に
行くから
私は
どうなっても
構わない
この地獄から
千石を救って
どうか――
…あっ…

……本当に
お前は『これ』を見ても――
後・悔・し・な・い・のか？
えっ……

第六十七節❖あの日の選択

外から見ても気色悪ぅく
あのキモい樹がまるごと街をドームみたいに覆ってやがる
『黒いやつ』……？って？
名無ちゃんと弟さんが言うには街中に黒い花びらみたいなものが舞ってたんですって
それに触れた人が次々に正気を失っていったとか
……まあ私には樹も花びらも見えないんですけどね
そう言われれば……飛んでたかも
それもあの樹のせいなのかしら…
あっ
見て！

夜明けだ！

クビツリさんと蛇さんが――
『紅』を止めた……の？
クビツリさん……
……そっか儀式成功したんだ
――やる時はやるじゃんあいつ
名無……
ちゃん――

今の……
は……
今見せたのは——
安登まつり
お前が居なくなった後
実際に起こる
『全ての出来事』だ
わ…私と……
千石の
子ども
……だって
いうのか
あの子が……?

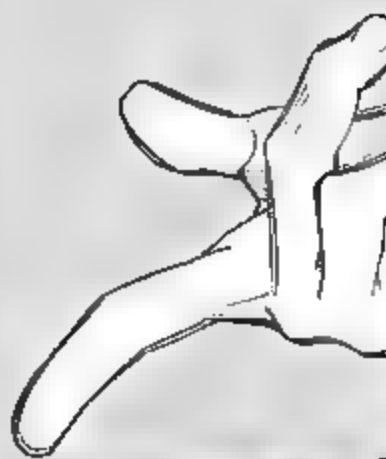
私たちが居なくなった後に
私の身体でずっと……？
……あいつは怨結びを憎んで
まだ見ぬ両親を取り戻すために闘ってきた——
あいつだけじゃねえ
お前の親父も
これが消えればまつりは元に戻る、
弟も
あのっ僕…安登まつりの弟です…
良かったら姉のこと、聞かせてもらえませんか
ずっと怨結びを追い続けてた……
少年A…千石揺のことは宇良上さんも
お父…さん
囃……まで
……なんで
なんでだ……
私…私のせいで
みんなが

……別にお前は悪くねえよ
千石を救いたかったんだろ？
だがお前ら二人が消えてめでたしめでたしとはならなかった
残された奴らにはお前らの居ない明日がくる

……ただ――
それだけのことなんだ

……ありがとう
……未来を見せてくれて……
でも
怨結びの使いをしてるあなたが……
どうして私にここまでしてくれるんだ？
やっぱり──
怨結びが悪いものだから？

……いいや
怨結びは――
縁を代償に
人を消す
良くも悪くも
それだけだ
……だが
怨を結んで人を消すしか
出来なかった現在と――
未来とでは
……ちょっと
事情が変わってな
改めて確認しに
きたんだよ
確認？

このまま怨結(えんむす)びで
千石の縁を
全て絶やすのか
それとも――
切った縁を
結び直すのか
要は消すか
消さねえか だ
縁を絶やせば
今見た未来
縁を結べば
千石は残るが
お前らは残酷な現実に
向き合うことになる
だがその先には
もしかしたら――

あの子が……
居る……
……決めた
私
私は千石と——

あ…れ？
え
やばいよ……
だってなんにも
考えてない……
なな ちゃ
それどこじゃ
なかったし
なんかいきなり
だったしさ……
こんな時
なんて言ったら
いいのか――

……私

あなたを殺さなくて良かった

『被害者の会』に潜入した時

必要とあらば首謀者の『名無』は殺すつもりだった

あの時あなたは彼にとって必要な存在だった

そして――

そんな名無ちゃんが
今こうして
私たちと肩を並べて
彼の行く末を
見守って
いるんだから
あっ 櫻さんも
行動力や度胸は
──きっと
また会えます
だって同じ
正直私
以外の人間に
なかったん

少なくとも
あなたたちは
『頼れる仲間』だった
……あー……
仲間
仲間かあ……
なんかいーかも
……それ……
わしゃ
わしゃ
ねえクビッリ

何もかも憎んでた
あの頃の僕が見たら
なんて言うかな……？
こんな日がくるなんて
夢にも思わなかったよね……
……
その時たった一人残された
ニセ神さまはいったい
どんな顔するのかなー？
……ありがとう
パパとママ
にも──
伝えておいて……
う……ん

俺寝てた……?
なんか……すっげー変な夢見た――
千石……っ
委員ちょ……
じゃなかった
まつり……?
千石が恐れる千石を――
私は……消せなかった
きっとまた……出てくる
……でも!

千石は
負けない!!!
あんな大男に勝ったんだ!!
七年も耐えて我慢して……
それが一度爆発したら もう衝動が抑えられない？
私を犯したくて堪らない!?
望むところだ!!
好きなだけっ……
すればいい!!

ちょ
なに……
何言ってんだよ!! いくら委員長がお節介だからって
おっお節介でせ… ……抱かれる奴がいるか!!

せっ…んごくのことがすっ
好き…
だからにきまっ……
……そッ
決まってるだろ……!!!
それ言ったらおっ
俺だってお前のこと
好きでもなきゃ
こんなことには――
……
……お願いだ……
……私と生きて

迷惑と言われようが今度は絶対に引き下がらない……!!
私も一緒に償う！だからっ……
迷惑……
だなんて
俺は……ただ
怖かったんだ……
委員長を傷付けるのが
怖かった……
最後にあいつから伝言だ

〝僕を宿してくれて
ありがとう〟
だとさ——
——ありがと
約束
守ってくれて
……なんだ
お前までこっちに
来ちまったのか？

ちょっとだけ寄り道！
にひっ
――ああそっかもう実体がねえから……
にしたって自由すぎんだろ……
そ
クビツリと一緒だねぇ
あ 今は神さまなんだっけ？
クビツリ様って呼べばいい？
神さまってガラじゃねえよ
やめて
……ねえ
ママが居なくならないってことはさ――
……安登パパや囃の未来も変わるかな？

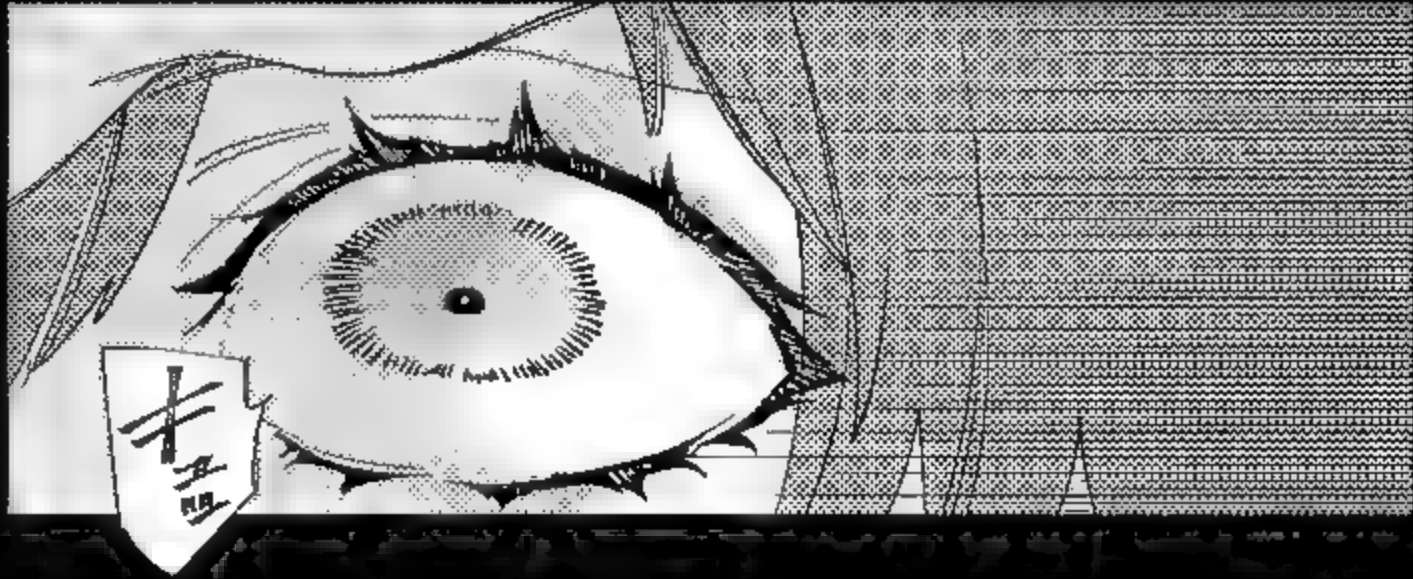
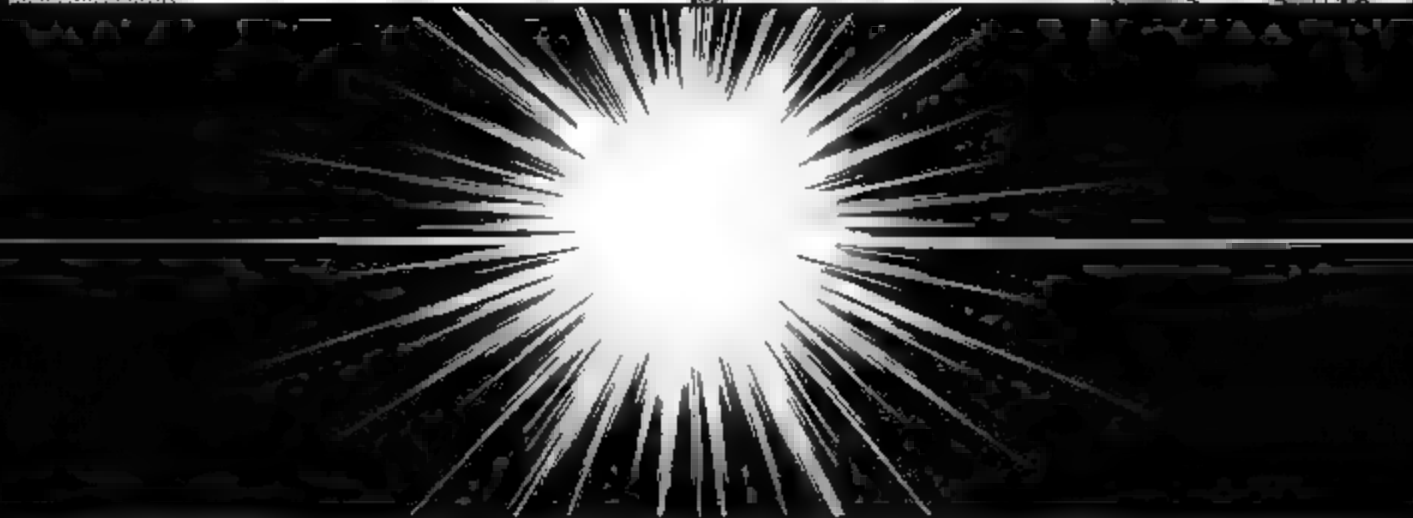
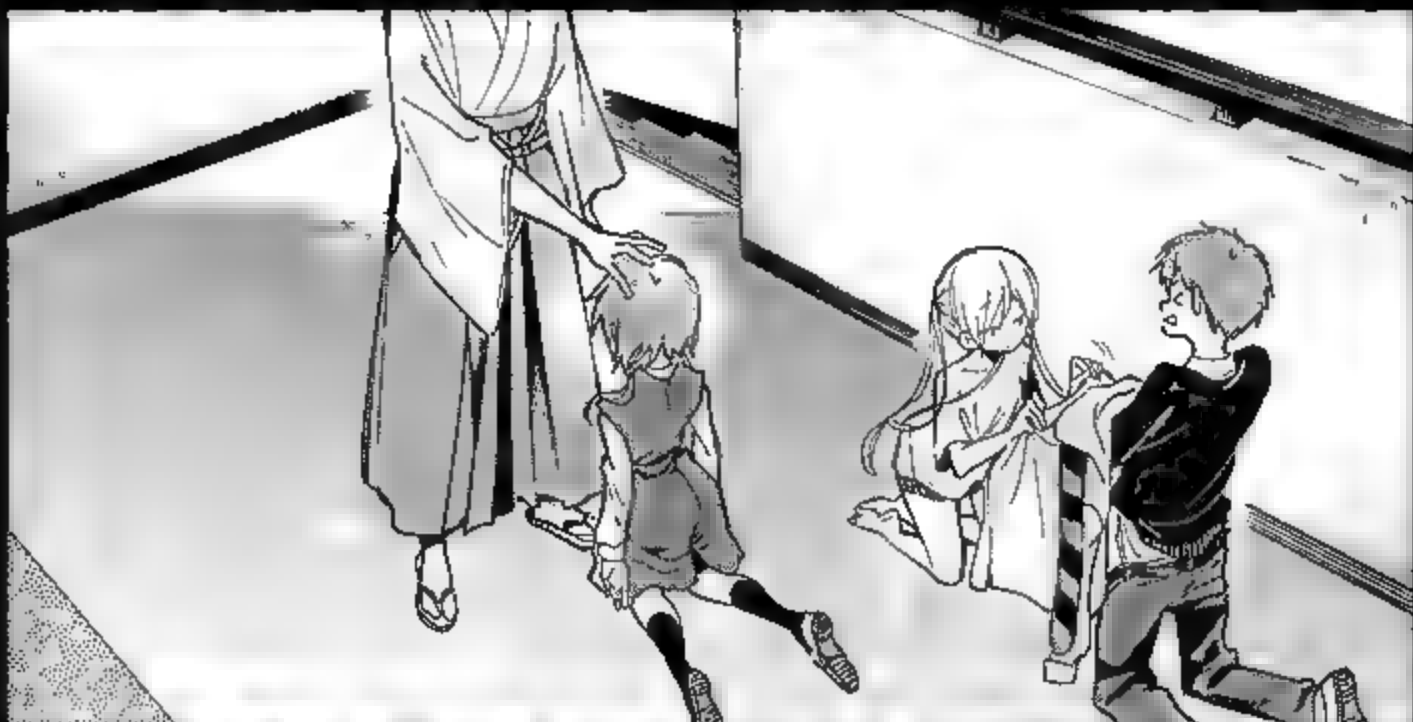
……多分な
でなきゃ俺はまたまつりの弟にボコられる
囃に!?
へ～～!
意外とやるじゃんあいつ
それともクビツリが弱すぎるの？
お前なあ……
そんでこれからどこ行くの？
そうだなあ……
……

……んっ
……いつも
う…っ
くっ
稲葉は私に意地悪ばかりしてきた
だから挑発した
とか思ってるんでしょ
してみたい……
怨結びで――消すために
っ続き……したら？
いっ
た
ぱんっ
うっあっ
ぱんっ
ギシッ
あ
ぱんっ
ギシッ

私がどんなに無視しても
稲葉だけは
懲りずに何度も話しかけて……きて
うわっ わっ わり…！
…なんで
喋れないほど痛いのか!?
女の子触んのも初めてだしっ……！
なんで？
私ひどいことされてるのに
なんで私こんなこと考えてるの
早く…… 早く消えてよ
──!!
さく… さくらっ
俺
その……俺 言いたいことが…
いや……
…

櫻
……やめて
おーい
櫻ぁ
やめてよ
そんなの
今さら
聞きたくない‼
ホントは
ずっとっ
お
お俺――
櫻のことが――……
知りたく……
ないのに――‼

……え？

これが昔の櫻ぁ〜!?
今と全ッ然変わんないじゃん!
逆に大人の櫻が制服着てるみたいでウケる
いやお前……流石にデリカシーってもんが……
真っ最中だぞ…
え　だっ
なっ
なんっ……
なんなんですかぁ
誰ですかあなた!?

これ・・・が・・・——

・・・私・・・・・・

・・・・・・でもさーあ

櫻って稲葉を戻した後のことは何も言ってなかったじゃん

結局コイツ助けてどうしたかったワケ？

エッチしただけで好きになったわけでもあるまいし…

いて

・・・・・・

・・・名無ちゃん

……違うの
稲葉があの時
何を言おうと
したのか
でも
知ったところで
…何も言えなかった
昔の私は……誰にも
自分の気持ち打ち明けたり
しなかったから
黙って無視して
やり過ごして
…一言『やめて』
って言えたら
良かったのにね
私――……
本当は……
気付いてたの……
……だから
きちんと……
返事がしたかった……

そのために
ここまで頑張ってきたの

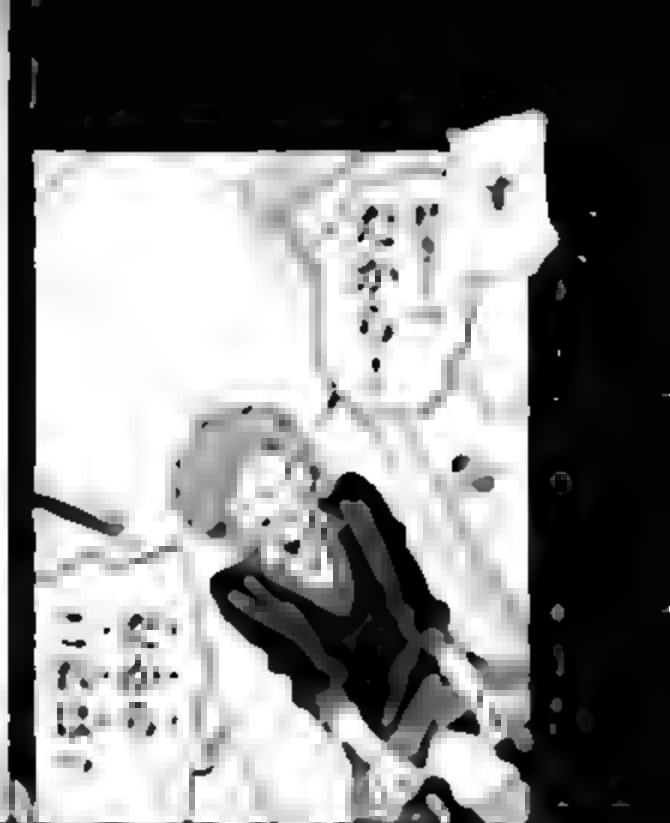
これで私――
やっと進める……

10数年分未来の記憶を一気に視たからな
……とはいえ恐らくあれは一時的なもんだ
視せただけで記憶を「上書き」したわけじゃねえ
？
あの瞬間だけは――俺らの知ってる大人の櫻だったんだろ
お前も まつりの記憶を視たからって まつりにはなれなかったろ？
あ〜！
そーゆーことか
俺らと話したことも未来の記憶と共にすぐ忘れちまうだろうさ
なんかの悪い夢だったってな
ふーん……
……
…

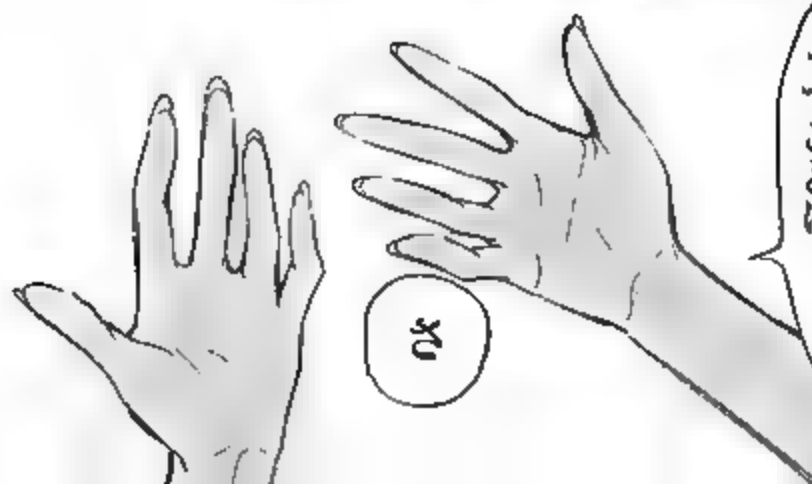
はぁ
はぁ
ガチャ
ガチャ
サ――……
……さ
さく…ら――
ごごめ……
ち
違うんだ！
おお俺
ほんとはずっとっ
櫻のこと
おっ…
気になってて

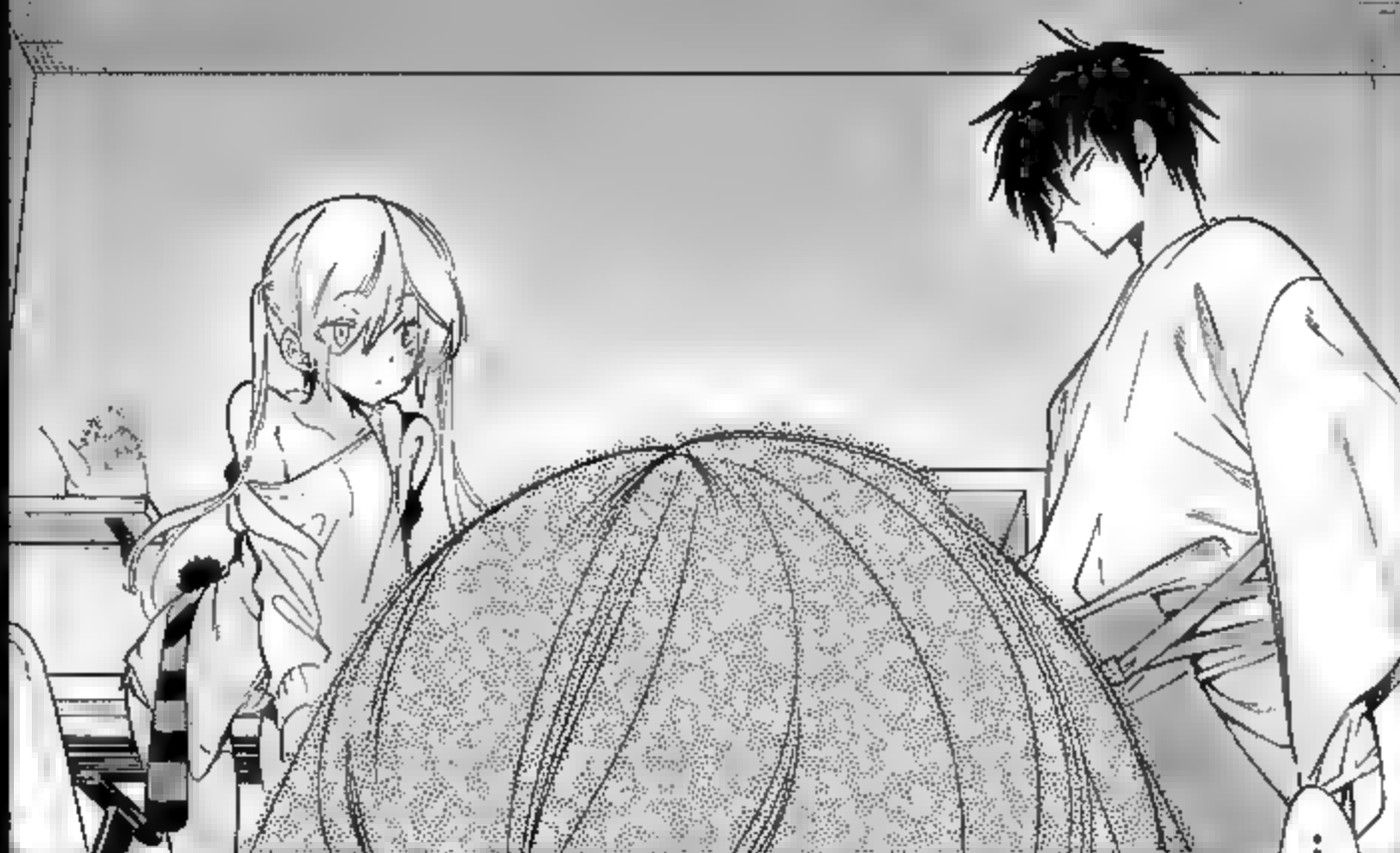
ぺたん…
わた……私は
私をいじめる稲葉が…
キライ!!

気にしてるおっぱい
大っっっキライ!!!
私がふつうに—
こんなことには…
ならなかった…かも……

ごめん……

わざわざ
『あんな世界』まで
来た上に……

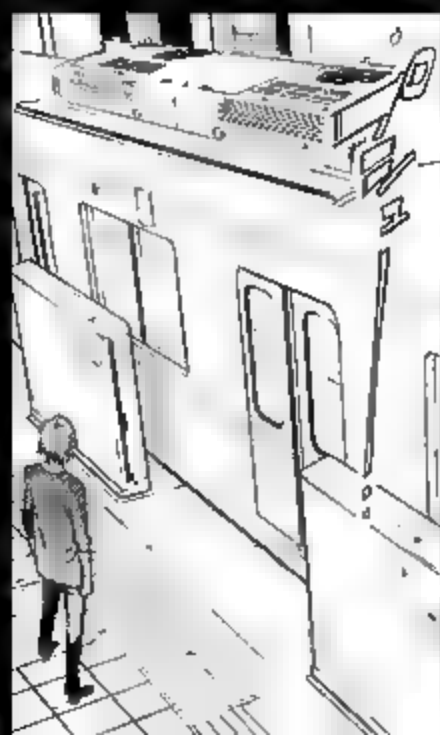
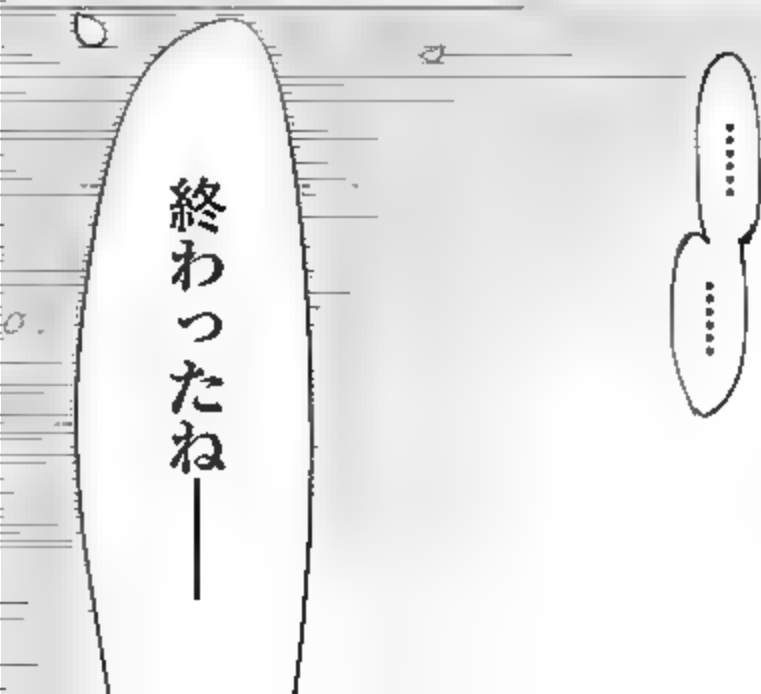
マジで約束通り
もう一度
会いに来るとか

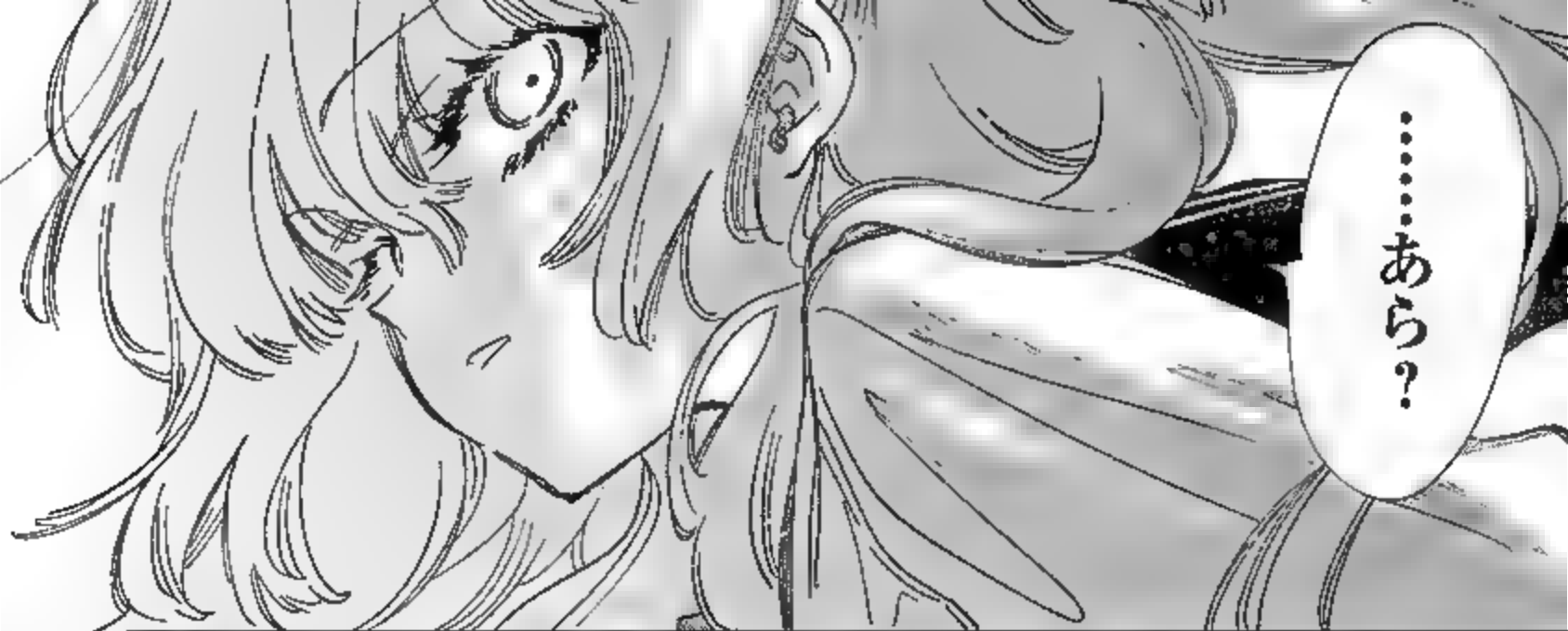
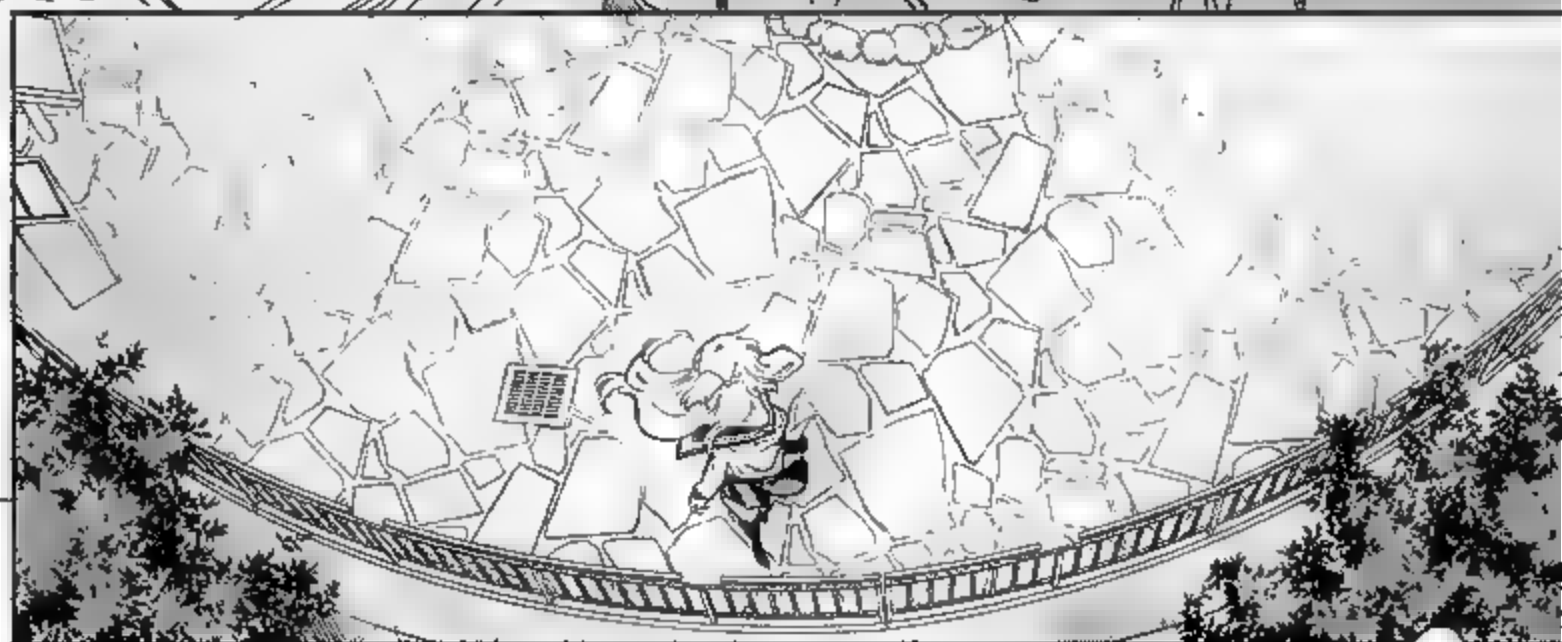
ホンット
お人好しな奴
……まあ
思ってたのとは
大分違う形
だったけど
う……
ホント僕が居て
よかったね〜
怨結びが成就した瞬間って
女の子みんなHなこと
してるもんねー？
黙れ
はあ〜………
しっかしまさか
この先呪いを
使いまくって
あたしまで
消えるハメに
なるなんてな…
ママが助けに
来るのも
驚きだけど
――けど…ここで
怨結びを使わない
ってことは…
さ

あたしを犯した
「コイツ」だけじゃなく
浦見台をいじめるあのクソヤローども全員と
これからも顔突き合わして生きてかなきゃならないってことなんだよな……
……っあーうッッッぜえええ
やっぱ消えてくんねーかなー!!
もしくは全員死ね!!!
……はあ……

けど……
浦見台とママが
一緒なら
…少なくとも
一人ぼっちじゃ
ないもんな
……っつか
やるしか
ねーじゃん
もう二度と…あんな
あんなに……
死ぬより辛い後悔が
あるんだ って——
きっと
この世界で人知れず
消えることが——
あたしに課せられた
『代償』なんだ
……あんたが
教えてくれた
からさ……

……良かったね
何がだ
あの女の子追いかけるほど気がかりだったんでしょ
っていうかクビッツリって常に色んな女の子追っかけてるね
誤解を招く言い方はよせ
役割上そう言えなくもないけどよ

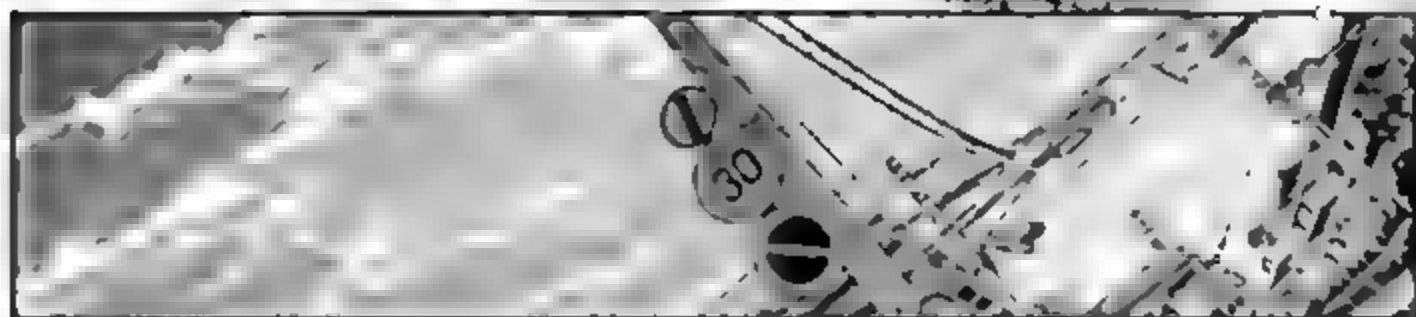
郷地

安登

はやし
わあー
……
……
終わったね――

……お前が居てくれて心底助かったよ
呪いを使った奴らはどいつもこいつも絶望の淵だ
そんな空気をぶち壊して呪い人を冷静にさせるなんざ——
……俺一人じゃ到底無理だった
そもそもクビッツリは裸の女の子に声かけたくないもんね〜
……
さーてと
つっかれたー
慌てて行くとこ間違えんなよ？
そんじゃ〜僕もそろそろおいとましよっかな
もう行くのか

僕がママを間違えるわけないじゃん！
……ああ
今までありがとな
名

……あら？
ああ…成る程
皆『過去の選択』を変えたから未来が変わって…
……ここに来る理由が消えたのね
……クビツリさんを追い続けた可哀想な櫻さんも
呪いに苛まれた名無ちゃん一家ももう居ない……
良かった……

……本当に良かった
彼にとって特別な人間は
……私以外
不要だもの。
30

ぴら…
神にされて数百年——
ようやく神の座を譲り
櫛に宿りて永き眠りにつけたと思えば……

即刻起こされいの一番に聞かされた言葉が――
『お前の本当の名前を聞いてない！』
とはなあ……
おかげで妾もめでたく『動く死体』だ
死体に櫛を埋め込んだのは妾がやったことへの意趣返しだろ？そうであろ？
…悪かったとは思ってる……
……まあよいわ
妾の名はな

──良い──……
名前だな……
……それだけか…？
……そなたは
知らぬようだが
はるか昔──特に女子は
名を明かすことを忌避し
仮名を使った
何故か
分かるか？
？
忌名を明かすことは
すなわち
全てを許し
身を捧げる
ことと同義

これで名実ともに妾はそなたのものだ
喜べ
──!?
そういうわけだから今後も変わらず妾のことは『蛇』と呼ぶが良い
のう『神様』?
その呼び方はやめてくれって言ってただろ……!!
ま…形はどうあれそなたは童の約束を叶えてくれた
今こうして妾が現世を出歩けるのはそなたと童の二人が神社から解放してくれたおかげ……
……童といえばひとつだけ──

クビツリを取り戻す際
体内に残ってしまった
朽ち縄……
そやつが障りを起こさぬかだけが気がかりだが……

今はただ
あの童に安らかな眠りが訪れるよう……祈りたい

……そうだな

数年後――

本当はマンションごと潰して立派な神社にしたかったけど

人が住んでると難しいわね

土地を考えれば充分立派です

それも異例のスピードで

これもあなたの力ですよ

ふふっ私の力だなんて……

これは神さまの力よ。

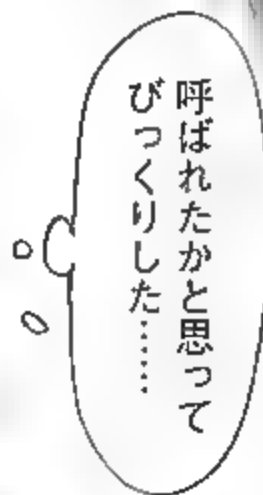
左の若いのが
企画担当者だと
女の方が？
まだ子どもじゃないか
どんなコネ使って
審査通したんだか……
あいつら……
いいのよ
言わせて
おけば
それより今夜
・・・手を貸して
貰えない？
も
勿論です
俺にはあなたより
優先すべき用事
なんてない
知ってる
でしょう？
ふふ♥
身元不明で
記憶喪失
その日暮らしの
ホームレスに
衣食住と仕事
そして『身分』を
与えてくれた

この人には感謝してもしきれない――……
時々知らない光景や感触がふと鮮明に蘇る時があるの
覚えのない過去を信じるのはそんなにおかしいことかしら？
勿論それだけじゃないわ
……私ね
クビツリさんは望み通り怨結びを終わらせたと確信しているのよ
最近巷で囁かれている「縁結び」の仲介人は赤い目の女の子なんですって
何より私が預かっていた彼の左腕
忽然と消えたそれを備えて現れた
なら……今の神様はいったい誰？

この人は
もう少しだけ
待っててくださいね…♡
グビツリさんではないけれど
限りなく彼そのもの——
あなたを必ず
『ここ』へ連れ戻して
あげるから——……
ふあ…
だる……
早く
終わんねーかな
交番勤務……
ポ

ちょっとそこの！財布落としましたよー？
え!?
あああ有り難うございまっ……
って……
よりによって私お巡りさんの前で落とし物って……
なんかすすみません……
おーい佐々巡回だ！ぼーっとすんな
ドキ
おっぱいすっげえ
ドキ
可愛い……ってか

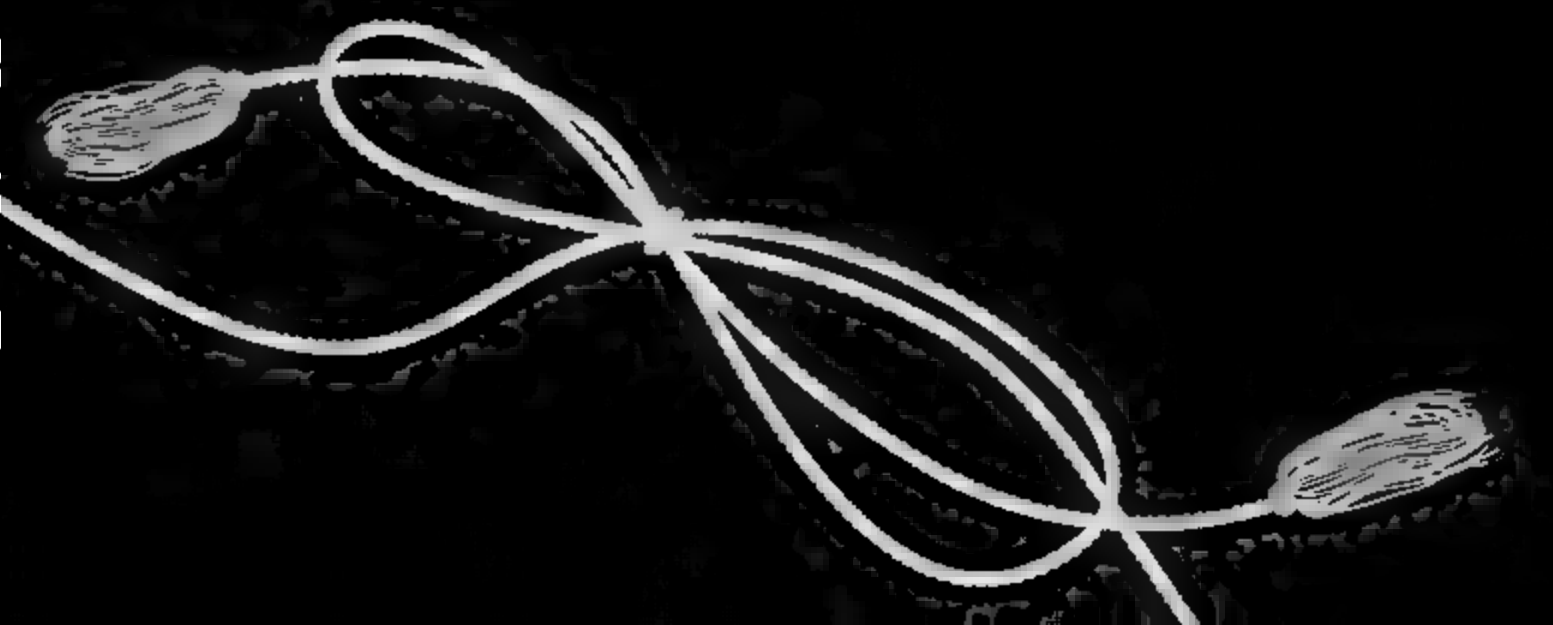
さくらー！
こーら
声おっきい！
お姉さんが
びっくり
してるだろ！
驚かせて
ごめん
なさい
いえいえ
そんな！
元気ですねー
さくらー
かわいい…
…斜向かいの
桜の木を見て
言ったのかな？
呼ばれたかと思って
びっくりした……
でも何か……

〝櫻!〟
気のせいか

――聞こえるか？
『縁』を求める人の声が

まったくだ
山ほど有り過ぎて困っちまうくらいだな
昔と違い何時でも人と人が繋がれる便利な時代にも
神に縋るほど繋がりに飢えた者がごまんと居る

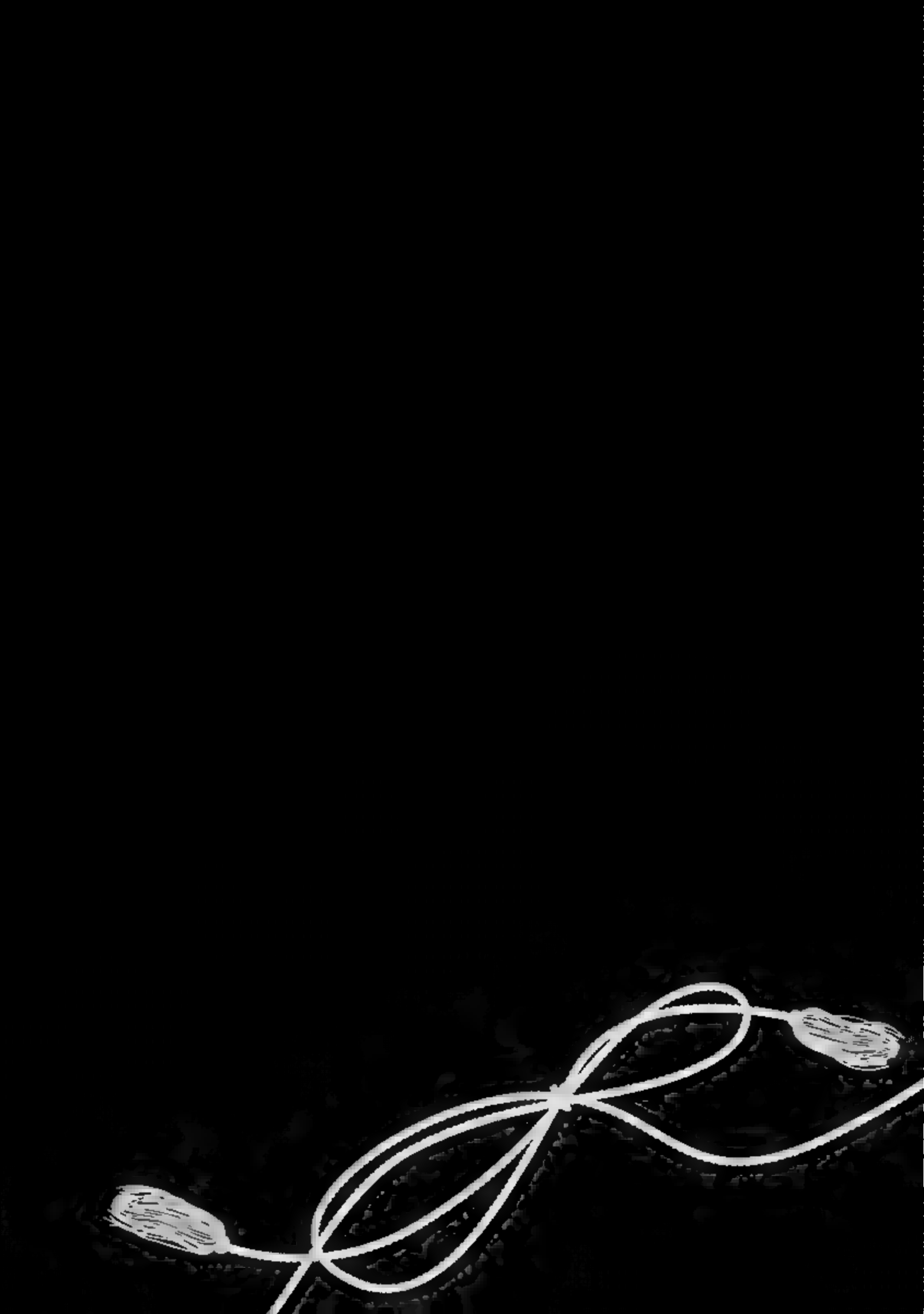
縁結びの神としては願ったりだろう
しかしな
我々も心得ておかねばならぬぞ

たとえ婚姻ひと・いえども理を曲げて縁を結べば——
使う者と使われた者の運命を少なからず歪めることになる

『縁結び』の神の名に恥じぬ働きをしようではないか
『神さまの怨結び』第⑫巻／完・完結

鳥羽を引き取った郷地は地元から離れ
新しい土地で幸せなひとときを過ごしたが、鳥羽は
成人すると同時に彼の前から忽然と姿を消した。
美しいまま消えたいという彼女の願いは変わらなかった。
心に傷を負った千石が医療少年院で過ごす間、
安登まつりは家族に支えられながら子どもを育てた。
出所した千石を迎えた時、会ったことのない彼を指さして
『パパ』と呼んだ子どもに周囲は大変驚かされた。
方をした
わなかった。
ごく普通の下着メーカーに就職した。長らく
恋愛には奥手だったが最近警察官の男性と知り合い、
時々食事をする仲になった。
中学校以来、稲葉とは連絡をとっていない。
二人目が生まれ、神社の再建後
報告のためお参りにやってきた。

メイは怨結びを撤回せず、
傷付いた胡に寄り添い続けた。
動画が証拠となり、知務を襲った男は逮捕された。
浦見台いじめはすぐには収まらなかったが、知務は
常に彼の味方であり続けた。卒業式、浦見台の告白で
ようやく二人は付き合い始めた。
闇堕ちした佐々や紅と出会わなかったにも関わらず、
再構築された世界において神永の凶行は
根津見メイとその周囲を限界まで追い詰めた。
その結果、メイの怨結びによって消滅した。
乙梨叶は記憶に違和感を覚え、クビツリが去ってからの
己の行動を何度もシミュレートした。その結果、ほぼ
正解に近しい結論を導き出した。自分はクビツリと再会し、
必ず彼の助けになったはずだと。彼女にとって
神社再建は彼を取り戻すための第一歩に過ぎない。

神さまの使いはいつも
甘い物を食べている。
再建された神社の桜に蕾がつき始めた頃から、
着物姿の幽霊の目撃談が後を絶たない。
縁結びを授かった人の中でも
肝心の『神さま』を見たと語る者は滅多に居ない。
運良く会えた人によれば、男児の姿をしてるという。

あとがき
巫女さんは私の三大性癖のひとつでした。
守月史貴です。
よりによって最終巻のあとがきが
煩悩に塗れた最悪の出だしとなりましたが、
実際己の『好き』をぶち込んで
煮詰めたようなお話になりました。
そんな不純(?)な動機から始まった
怨結びがこれだけ長く続き、
こうして大団円を迎えることができたのも
応援してくださった読者さまと
お力添え頂いたアシスタントさん、
そして連載が始まる前の読み切りから
ずーっと支えてくださった
担当さんのおかげです。
新しいお話もきっと残りの
二大性癖、そして沢山『好き』を
詰め込んだ作品になることでしょう。
最後になりましたが、
長らく『神さまの怨結び』をご愛読頂き
本当にありがとうございました！
21.9.22
Special thanks(敬称略)
tarow
カエル紳士
Runa
ちあ
担当編集 浜野
Official blog
http://kamishiki.net/
Twitter Kamizuki_S1

電子特装版

神さまの怨結び 12

❖かみさまのえんむすび

限定特別画集

守月史貴

Champion RED Comics

O ENMUSUBI
AMIZUKI SIKI

O ENMUSUBI
AMIZUKI SIKI

KAMISAMA NO ENMUSUBI

Presented by KAMIZUKI SIKI

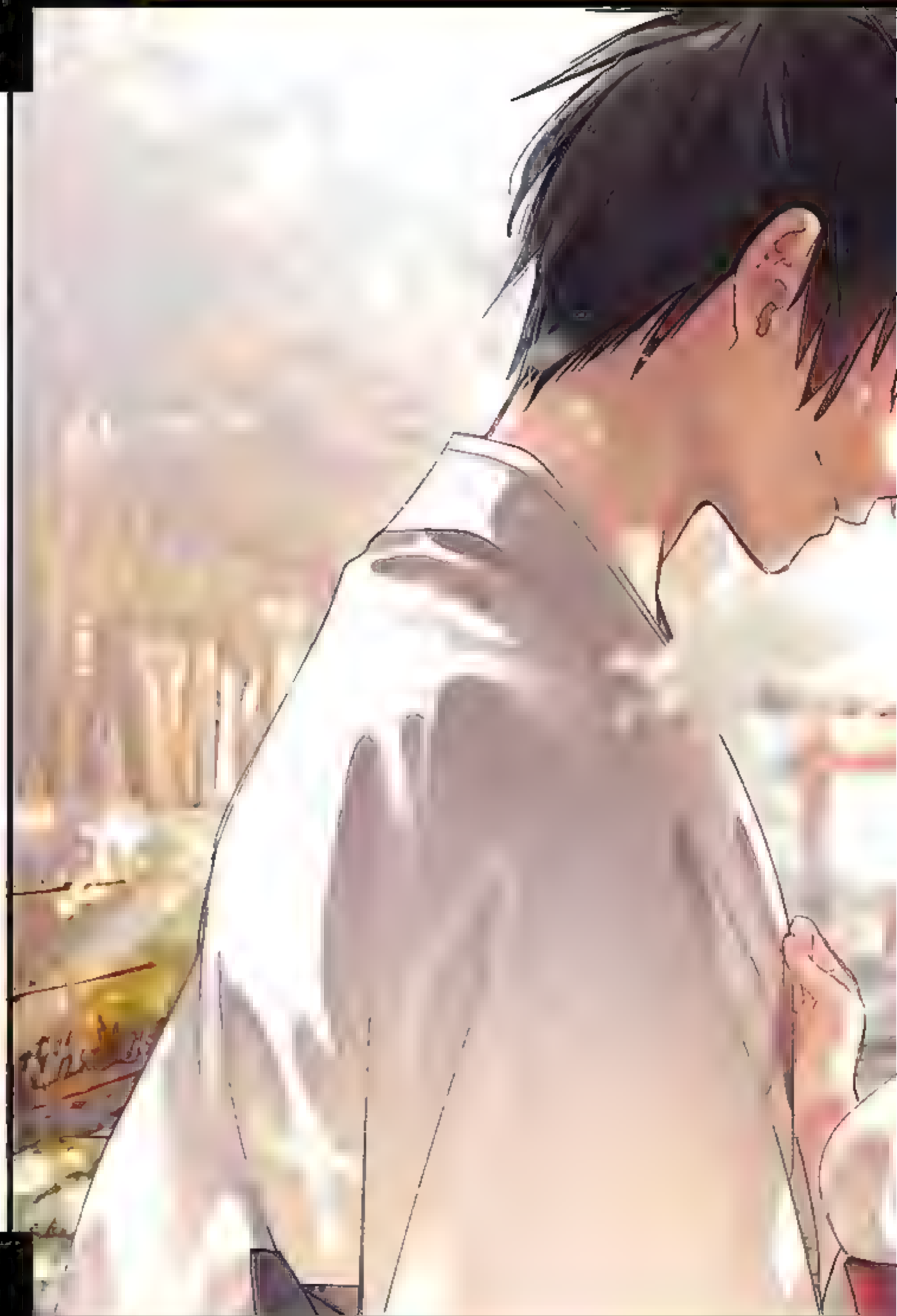
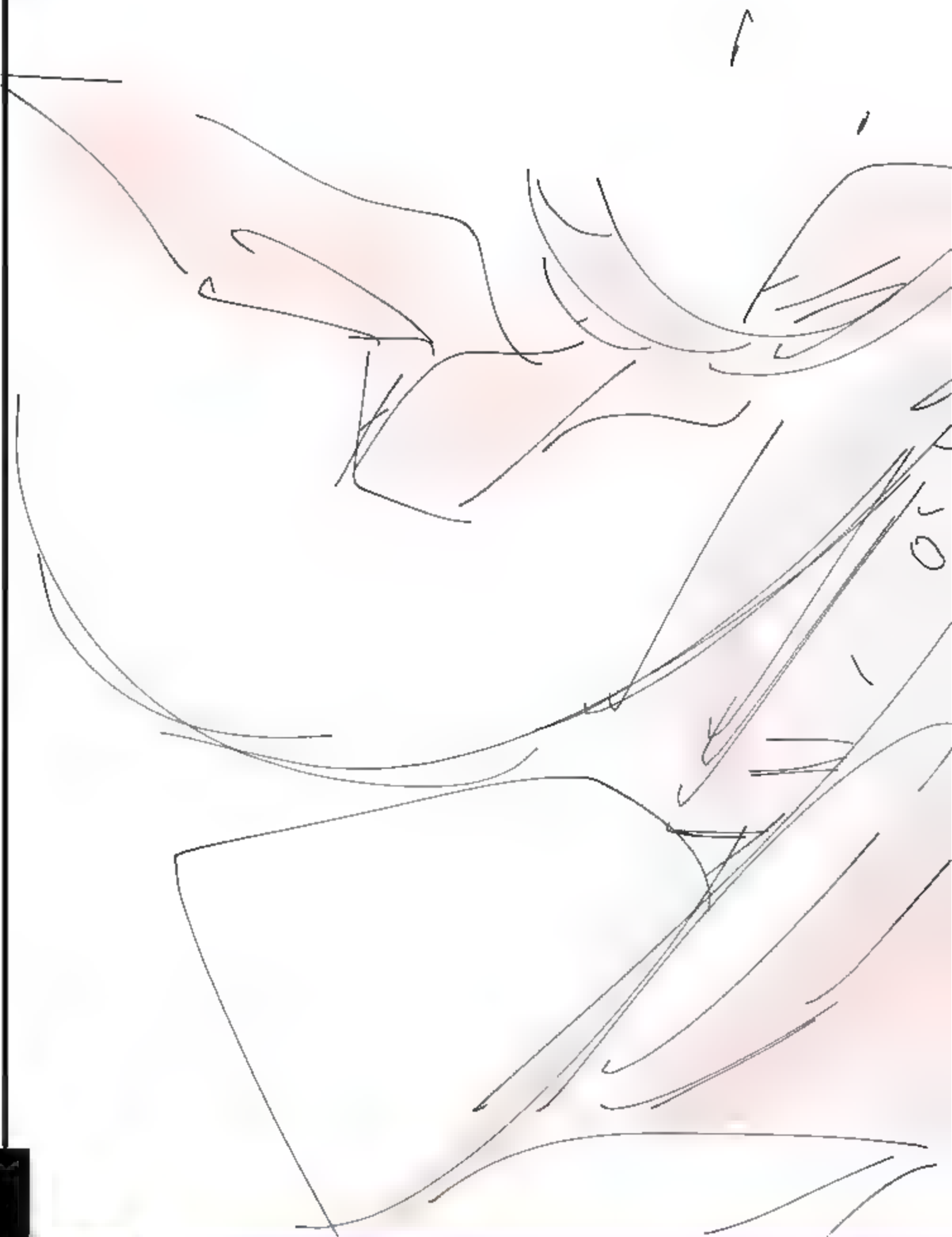
KAMISAMA NO ENMUSUBI

Presented by KAMIZUKI SIKI

KAMISAMA NO ENMUSUBI

Presented by KAMIZUKI SIKI

KAMISAMA NO ENMUSUBI

Presented by KAMIZUKI SIKI

あの時のうらがわ
いつもより入念に
禊を済ませ
とっておきの
香も焚いた
これ以上ないほど
妾の用意は完璧だ
あとは落ち着いて
クヒツリの準備を待つ
ばかりなのだが
遅いな……
遅いと要らぬことを
考えてしまうな…
これから奴と
本当にその
……
するのか…？
落ち着けるか
なんでもいい
何か気の
紛れることが
ないと死んでしま
く
蛇…
ビクゥー
着物の着方が
全っ然わかん
ね…んだけど
袴の下って
どうすりゃ
いいんだ
たくし
上げんのか？
ぐ
ちゃあ…
ずる
ずる

まっことそなたはあぁ仕方ないのお

脱げ!!!

いま妾が着付けてやるからの

くくく儀式前へ続く。

神(かみ)さまの怨結(えんむす)び⑫

2021年11月25日　初版発行

著　者　守(かみ)月(づき)史(し)貴(き)

発行者　石井健太朗

発行所　株式会社 秋田書店
〒102-8101　東京都千代田区飯田橋2-10-8
☎編集(03)3265-1326　販売(03)3264-7248
製作(03)3265-7373
振替口座　00130-0-99353
印刷所　大日本印刷株式会社
Printed in Japan

ISBN978-4-253-23631-7

デジタル版　2021年発行
製作所　デジタルカタパルト株式会社
http://www.digital-catapult.com